

Historical Studies of Socialist System

ISSN 2432-8774

# 社会主義 体制史研究

No.12 (February 2020)

東独文化政策における規制と緩和(1963～1976年)

—東独ホーネッカー政権初期の自由化について(2)—

青木國彦(東北大学名誉教授)

Die schwankende Kulturpolitik in der DDR (1963-76)  
--Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (2)--

Kunihiko AOKI (Professor emer., Dr., Tohoku University)



社会主義体制史研究会

The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System

## 『社会主義体制史研究』(Historical Studies of Socialist System)

ISSN 2432-8774

Website: <http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm>

下記の旧 URL から自動切替(リダイレクト)です。2019.08.22 午後までの約 2 週間はリダイレクトが機能せず、ご迷惑をおかけし、お詫び申し上げます。

旧 URL: <http://www.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm> (違いは数字「2」の有無のみ)

publisher: 社会主義体制史研究会

(The Japan Collegium for Historical Studies of Socialist System)

size: A4

mail to [aoki\\_econ3tohoku.4.5](mailto:aoki_econ3tohoku.4.5) (3=@ 4=ac 5=jp)

不定期刊(原稿があり次第発行)、文字数制限なし、無料のオンライン・ジャーナルです。

旧社会主義諸国(共産圏)の歴史(「革命」前・体制転換後を含む)と、社会主義や共産主義の思想・理論を対象に批判的検証を志しています。投稿歓迎。

### 表紙の写真 © Kunihiko AOKI 1982年3月撮影

東ベルリン中央区アレキサンダー広場にあった書店「良い本」(Das gute Buch)。ある本が「良い」かどうかは読者ではなく、東独文化省出版・書籍販売本部が決めた。

東独の検閲制度は早くから知られていたが、検閲の実態は東独作家ヘルムリンの「覚書」(1972年)が明らかにした。「覚書」は、当時第1書記になったばかりのホーネッカーの求めに応じて作成・提出され、1995年にヘルムリンの著書の中で公表され、シュピーゲル誌も抜粋を掲載した(詳細は本号掲載論文5節・5a節)。



鹿島が設計施工し開業1年後のインターホテル・メルクーア(ライプチツピ)の日本庭園。1982年3月ホテル内から撮影 © Kunihiko AOKI。

今はウェスティンのホテル。

ブレジネフは、東独の西側ツーリスト向けであるインターホテルに聖書が置かれていることを知り、東独の「イデオロギー状況」を懸念したが、ホーネッカーは「ばかばかしい話」と評した(本号掲載論文脚注18参照)。

## 東独文化政策の規制と緩和(1963-1976年)

### —東独ホーネッカー政権初期の自由化について(2)—

青木國彦\*

## Die schwankende Kulturpolitik in der DDR (1963-76)

### - Über Honeckers „Liberalisierung“ (1971-75) in der DDR (2) -

Kunihiko AOKI\*

#### 目次

1. はじめに:緩和と規制の繰り返し 1
2. 緩和:1963年9月政治局「青年コミュニケ」2
3. 規制:1965年12月「皆伐総会」(中央委第11回会議)4
4. 緩和:1971年12月「タブーは存在し得ない」(中央委第4回会議)6
5. 1972年5月ホーネッカーの依頼による作家ヘルムリン(Stephan Hermlin)の検閲批判 7
- 5a. ヘルムリンの検閲批判に関連して:ハイム(Stefan Heym)の『誹謗文書または女王対デフォー』発禁理由 10

6. 1972年7月中央委第6回会議 11
7. 1973年5月中央委第9回会議 11
8. 1973年6月リュール(Jürgen Rühle)の見方 13
9. おわりに:1976年11月ホーネッカー政権初期の自由化の終焉 15
- 補注1 皆伐総会前夜に配られた「研究資料」リスト 15
- 補注2 西独ジャーナリスト・リュール(Jürgen Rühle)の人生と東独情報源:その情熱と突然死 15
- 略語 16
- 引用文献 17

#### 1. はじめに:緩和と規制の繰り返し

本稿は、ホーネッカー政権初期(1971-1976年)の文化政策の主要な変化を、その前段階(1963年以後)からの推移も見ながら、概観しようとするものである<sup>1</sup>。

壁建設から2年後、「壁の中の平和」を達成した東独当局は「社会主義の包括的建設」に邁進しつつ、国民の隔離不満の緩和のために一定の自由化(規制緩和)に着手した。

壁の青年への大きな影響の1つは「ダンス音楽」であった。それは青年の自由時間生活の重要構成部分であったからである。当局が「墮落音楽」「帝国主義の手先」ロックンロールを幾ら規制しても、壁がなければ青年たちは西のラジオだけではなく、西ベルリンにおいて生で熱狂し、レコードを持ち帰ることができた。壁はこれを不可能にした。

これに対して、西ベルリン通いをしていた少年ガルテンシュレーガーら5人のロックンロール・ファンが「共産主義者は出ていけ!」、「門を開けよ」などのスローガンのもと壁反対の「蜂起」を企てた(青木2018a参照)。これは例外的行動であったが、青年たちの不満は強烈であり、1960年代には当局は青年掌握に悪戦苦闘した。

その際一方で締め付け(政治教育や組織の縛り)強化の策も提案されたが、「壁の中の平和」が青年の好みの尊重(妥協)による掌握策を可能かつ有力にした。

当時の第1書記ウルブリヒト(Walter Ulbricht)はFDJ(自由ドイツ青年団、実態は官製青年団)の異色の活動家トルバ(Kurt Turba)を抜擢して「青年コミュニケ」(Jugendkommunique)を作らせ、SED(ドイツ社会主義統一党、東独支配党、実態は共産党)の政治局決定とした(1963年)。

こうして自由化が始まったが、すぐにSED内で反発が強まり、いわば巻き返しが成功する(1965年10-12月)。その中心は当時有力な政治局員のホーネッカー(Erich Honecker)であったが、ウルブリヒトも追随した。

しかしホーネッカーは、1971年にウルブリヒトを追い落とすと、一転して文化芸術に「タブーはあり得ない」と言い、従来

の発禁本の出版や、西側ジャーナリストを交えた率直な討論会の実施を容認し、とりわけ第10回世界青年学生祭典(東ベルリン1973年夏)では「自由」が謳歌されるなど、実際の自由化現象が人々の目に焼き付いた。その空気の中、正面から出版の自由を求めて検閲制度に挑戦する作家グループも登場した(1974-76年アンソロジー「ベルリン物語」企画、以下単にアンソロジー企画と呼ぶ)。

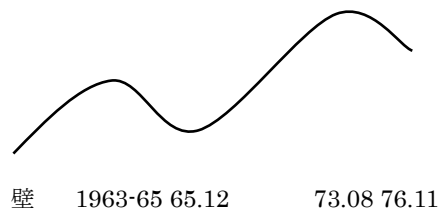
このアンソロジー企画はシュタジ(東独秘密警察)の作戦により、作家同盟等の協力のもと、秘密裏に、世間に全く知られないまま1976年夏までに完全に阻止された。

さらに当局は1976年11月16日に国内外の世論の面前で、人気のシンガーソングライター・ビアマン(またはビーアマン、Wolf Biermann)を陰謀によって追放し、自由化停止の号砲とし、追放に抗議する文化人への圧力を強めた。

他方、追放抗議声明を出した文化人のみならず世論も反発と落胆を強めた。

こうした経過の図示が図1であり、縦軸が自由化度(上ほど高い)である。

図1



このように、東独当局の文化政策には規制の強化と緩和が交互に生じたが、しかし全体としては緩和の趨勢であった。

言うまでもなく共産党独裁下に完全な「異論の自由」はあり得ないが、言論統制の強さには大きな巾があった。ホーネッカー時代(1971-1989年)の中でも変遷があった。国民はある種の自由を与えられると、もっと自由をと要求し、当局は抑えにかかることを繰り返しつつ、長期に近似曲線的に見れば自由度が増大した。

\* 東北大学名誉教授。Prof. emer., Dr., Tohoku University

<sup>1</sup> 引用における□内は青木による。本稿は2019年11月9-10日のロシア東欧学会大会(慶応大学三田キャンパス)に提出した報告フルペーパーのうちの一部を抜き出し、多くの増補とともに、東独作

家ヘルムリンによる包括的な検閲実態批判(1972年5月の「覚書」)(5節)および関連する作家ハイムの『誹謗文書』発禁理由(5a節)を加え、また一部の構成や表記を変更した。残る部分(アンソロジー企画の検閲挑戦およびビアマン追放事件)は別稿とする。

規制と緩和の変化の直接的動力は、共産党独裁特有のイデオロギーと制度、および絶対的な対ソ追随(40万人のソ連軍が駐留)を大前提としつつ(但し1980年代初め以後徐々に揺らぐ)、国際環境の変化と国民の不満の推移、支配党内の対立(上層部におけるウルブリヒトvs.ホーネッカーvs.シュトフ(Willi Stoph)ほか、および党内不満)などであった。

とりわけ以下の国際環境激動が小国東独を揺さぶったが、それにどう対応するかは権力者と国民次第でもあった:

まずフルシチョフとケネディの容認による壁建設(→相対的国内安定)(青木2018参照)、フルシチョフ失脚によるソ連の政策変化、隣国での「ブラハの春」とその軍事的鎮圧(東独でも広範な批判)、その後の「社会主義国家共同体」(=ブレジネフ・ドクトリン)によるソ連からの締め付け強化、国際的な東独「承認の波」に対応した「世界に開かれた」国の必要、両独基本条約と関連条約・協定(大きな経済的恩恵と、西独政府の戦略「接近による変化」の影響の日常化)、国連加盟と人権規約批准、CSCE(全欧安保協力会議)参加・進展による内外からの人権要求増大などであった。

以下では、1963年以後の文化政策の変遷を示すSED中央委員会の主な動き、それらに関連する作家たちや東独初期に関わりのあったジャーナリスト兼文学研究者リュウレの反応、当時の論評、その後の歴史家の評価、あわせて、1972年にホーネッカーの依頼で作成された作家ヘルムリン(Stephan Hermlin)の「覚書」が暴露した東独の検閲実態と、その補足としてハイムの発禁理由例などにもとづいて、1976年11月16日ビアマン追放までの東独文化政策を概観し、各々の諸論点を検討する。

## 2. 緩和:1963年9月政治局「青年コミュニケ」

「スローガンの範囲に留まらない社会の民主化への傾向が実際に1963-1965年の青年政策から始まった」(Agde 1991:151)。その象徴かつガイドラインが「青年コミュニケ」であった。それは政治局付属の青年委員会が案出し、その責任者がトゥルバであった。

言葉としては民主化より自由化がふさわしい。独裁政治の廃止ないし緩和には全面的ないし部分的民主化を言い得るが、ここでは独裁政治維持の下での規制緩和だからである。

当時ウルブリヒトは青年対策の現状を官僚主義、教条主義として激しく批判し刷新を求めた。そのためトゥルバらが現状分析と対策を立案した。それをSED政治局が「青年信頼と責任」("Der Jugend Vertrauen und Verantwortung)と題した「コミュニケ」として1963年9月17日に決定し、同月21日中央機関紙ND(ノイエス・ドイチュラント、意味は「新ドイツ」)に公表し、30ページのパンフレットも発行された。一般に「青年コミュニケ」と略称される。

その決定は、東独が先陣を切って経済改革(いわゆる「新経済制度」NÖS)<sup>2</sup>を開始した直後のことでもあった。だいたい指令調である政治局文書としては、青年コミュニケの内

容も文体も異例、画期的であった。以下では上記ND紙からの転載であるDübel(1964:140-166)を利用する。

前書きのあとは以下の小見出しが付けられた(簡略化):

人生の意味  
金床かハンマーか  
青年は信頼に値するか  
今の若人はいかにして社会主義者になるか  
理念と理想を手に入れる!  
学べー諸君が責任を担わねばならない  
原則:各人が能力に応じて、各人に業績に応じて  
農業は望みが高い  
自分の考えを持つ努力のための勇気を持って  
世話焼きでも成り行き任せでもなく  
青年の真の愛  
このコミュニケは考えと行動の手引きで、ドグマではない

青年コミュニケは長文なので、一部を抜粋し紹介する。その際Mählert(1996:150ff.)やRauhut(1993:62f.)の着目点を参考にしつつ追加もした。ページ(S.)はDübel(1964)のそれである。まず青年と自国の意義を強調した(冒頭)

「親愛なる若者たち、親愛なるドイツ民主共和国市民!ドイツ社会主義統一党[SED]第6回党大会はDDR[東独]における社会主義の包括的建設を決定した。…今日の若者たちが二三十年のうちに社会主義ドイツの主人公になる。今や若い人たち、若い専門労働者、協同組合農民、技術者、教師、エンジニア、医師、芸術家、科学者の時がやって来た」。

「ドイツ最初の労働者農民国家であるDDRは」社会主義化の成功によって「1つの歴史的時代だけ西独に先行している」。「先行の基準は資本主義の次が社会主義・共産主義というマルクス・レーニン主義史観。」

諸国民の平和と同権の国際関係の基礎を形成した。

「我々は、真の民主主義と本当の自由は、人による人の搾取から解放された人民が自ら国家を管理する場合にのみ可能であることを立証した」。

これらの「わが共和国の偉大な業績」を可能にするために「DDRの青年が決定的に手伝った」。

[以上の確認の上でこのコミュニケにおいて、]「我々は社会主義の包括的建設の際に青年が直面している最も重要な諸問題への注意を喚起したい。これらの問題は多くの若者たち並びに労働者、協同組合農民、教師、科学者との会談や相談の中で確認された。…我々はそれらを率直に、事実即して、冷静に、かつ批判的に記述している」(S.140f.)。

「年輩のDDR市民」には次のような問題がある(S.147):

その多くは「青年を信頼し、彼らを理解し援助する」が、「かなり」は「不快感とある種の不信感をもって青年に接し」、青年たちは「社会主義の包括的建設が彼らに求める高い要求を満たし得ないだろうと信じている」。

Hans Apel)の自殺(1965年12月3日、後述の皆伐総会直前)が関係したかもしれない。1925年生まれのラインホルトはイエーナ大学卒業すぐ1951年フンボルト大学政治経済学教授になり、1953年からSED党大学の講座長などを経て、当時は1962年からの中央委付属社会科学研究所所長かつ同社会科学アカデミー学長という政治経済学分野の要職にあった。1959年祖国功労賞、1965年国家功労賞でもあり、1967-1989年SED中央委員であった(Müller-Enbergs 2010:1056)。

<sup>2</sup> Richtlinie für das neue ökonomische System der Planung und Leitung der Volkswirtschaft (Beschluss des Präsidiums des Ministerrates vom 11. Juli 1963), in: ND vom 16.07.1963. 「ブラハの春」における経済改革の指導者シク(Ota Sik)の主著『経済・利害・政策』(チェコ語原書1962)も影響を与えただろう。東独においてドイツ語訳 Sik(1966)が出版されたからである。それはラインホルト(Otto Reinhold)の監修かつ1965年9月付けの彼の序文付きであった。ところが出版は1966年になった。この遅延には、対ソ経済関係苦境や、東独経済改革の責任者アペル(Erich

彼ら懐疑論者は、「若いわが労働者、協同組合農民、技術者、技師、芸術家、科学者を外見的な現象によって判断している」のであり、「殆ど表面的にしか青年の諸問題に取り組んでいない。彼らは官僚的な方法で青年に接し、青年の間でのその活動は“複雑”であると驚いている。彼らは、青年というものはその父親とは異なって社会主義に到るというレーニンの指摘を知らない。ドイツ社会主義統一党はわが青年たちを信じないすべての者と関わりを持たない。」

「わが党は、若い人々への高い要求が同時に彼らへの最善の信頼であるという基本方針に基づいている。「自立的に考えるどの若い人々にも、〔西独を含む〕ドイツ全体の将来は社会主義秩序にのみ存在するということがこの間に明らかになった」。

「官僚的な方法」によって青年に対処する人間とは当然、党や行政、経済組織、社会組織、教育組織、文化施設などの幹部であり、そのうちの「かなり」の数だと言う。

上記には「自立的に考える」青年たちは、東西両独を含む「ドイツ全体」の社会主義化を確信しているのだから、信じるに足るとある。しかし青年世論調査によれば当時はまだこのような青年は「大多数」ではなかった(青木 2019:14 節)。

青年政策における「官僚主義」や「教条主義」への批判はこの頃ウルブリヒトが激しく展開していた(後述)。コミュニケにも「教条主義」批判もある(S.151f.):

「若い社会主義者は、人類によってその長い歴史の中で生み出された偉大な精神的業績を自主的、批判的に消化し、社会主義建設への日々の積極的参加の中で、それらが自己の生活分野に応用されるように配慮しなければならない」。

「マルクス、エンゲルス、レーニンの古典的作品のすべては、間違った見解、また敵の見解との論争の中で生まれた」にもかかわらず、「かなりの社会科学者や公民教師は今日、そうした論争を恐れている。というのは彼らがまだ教条主義の影響下にあるからである」。

「青年たちの“不愉快な”問題を厄介なこと、あるいは挑発として片付けることは、これ以上許されない」。そういうやり方では「青年たちが偽善に追いやられるからである。我々はむしろ、安定した性格を備え、自分の考えによっておよび遅れた見解や反動的なイデオロギーとの論争の中で達成され、進んだ科学的認識に基づく社会主義的世界観を持った、独立し自己意識ある公民を必要としている。しかしそうした人格の教育は、生徒が将来の公民として尊重され、生徒の諸問題が真剣に取り上げられる場合のみ可能である。そこには、我々の現実、社会主義の包括的建設の際に生じるすべての成果、しかしまた問題や紛争の正確な認識が属する」。

問題は社会主義的世界観への縛りと自主的・批判的な自己意識ある公民の育成の両立可能性にあるが、ここでの強調点は後者にあり、教条主義・官僚主義を捨て青年の中に入り「現実」と取り組みという批判かつ決意表明であった。そのあるべき姿は(S.159-161):

「我々は、研究所や大学における、真の科学的業績を妨げている図式主義の現象に反対である。我々はすべての教員に、彼らに委ねられた若い人たちを自立的に考える社会主義者に教育し、よい成績が主観的な教育者の意見への縛り付けに依存させられることがないように呼びかける」。

「我々はすべての両親、教師、マイスター、クラブ責任者、FDJ や労組、スポーツの幹部に、青年が自由時間を自分と社会の利益のために意義深く利用するように、彼らをとりわけ居住地域においてオリジナルかつ有効な方法で援助するように呼びかける」。

「けれどもこの援助は、子ども扱いや、叱る、指図することの中には存在し得ない。若い人々を興味のない文化あるいはスポーツの催しに強要することはできない。むしろ、青年男女がその自由時間を広範囲にみずから組織し過ごすために、好きで楽しいを呼び覚まし刺激することが重要である」。

「自由時間は社会主義的生活の重要な一部であるから、そのうちの 1 時間でも階級敵に委ねられてはならない。もっと興味を引く文化やスポーツの催し、公演、討論会等々によってその影響に立ち向かうべきである。このことはとりわけ村々に当てはまる」。

見られるように、コミュニケは、あれこれと青年、のみならず人民全体の頭と手足を縛るいわゆる「後見主義」を批判し、自発性尊重という意味での自由化を主張した。これは、あくまで「社会主義」の枠内であって我々が考える自由主義とは異なるが、それでも人々、とりわけ青年たちにとって自由の空気の吹き込みであった。

青年の自由時間にとって特に重要かつ西側文化との争点でもあるダンスとダンス音楽についてコミュニケは(S.162f.):

「最近一定のダンス形態について、一方では西側の非文化の影響によって、他方では青年に対する度量の狭いやり方によって引き起こされた多くの議論があった。この問題についての党の態度は以前同様に明確である。我々はダンスを生きる喜びと生きる意欲の正当な表現と考えている。かなりの人々にとって、ダンスの催しと政治的な催しの間の違いを理解することは気が重いことである。政治的な催しでは政治問題が理性と熱情をもって議論される。そこではとりわけ頭が活動する。ダンスの催しではそれがほんの少々異なる。そこではなるほど頭も伴うが、感覚と気分をまず第 1 に演説によってではなく、動作によって表現する」。

「ダンスの際の感覚と気分をワルツあるいはタンゴのリズムでのみ表現すべきだと青年に指図することは誰も思いつかない。青年がどのようなリズムを選ぶかは彼らに任せられる。重要なことは彼らが *taktvoll* であり続けることだ!」。*[taktvoll* は「思いやりがある」とか「礼儀正しい」という意味だが、ここではその意味と *Takt*(リズム)の豊富さ(*voll*)を掛けていると思われる。]

「働く人間の健康な生命感に由来するすべての国々と時代の民族舞踊は、色々なリズムと色々な動きの形を知っている」。

このように、ダンスに政治を持ち込むことに反対し、リズムの多様性も容認した。但し限定があった:

「我々は興奮させるリズムに賛成であるが、帝国主義のプロパガンダのイデオロギー的な妨害工作の流行歌歌詞や他の手段がそれらのリズムとともに我々のところに持ち込まれることには強く反対する。我々は青年の名においてすべての作曲家と流行歌作詞家に、青年を感動させるもっとファンタジー豊かなメロディーと歌詞を作るようお願いする。そうなれば将来には DDR で西側の流行歌が歌われることが少なくなり、むしろ DDR 生まれの我々の新しい生命感にふさわしい歌詞を持つ感動

的な流行歌が両独で歌われるだろう」。

ここには歌詞は問題になるとある。従って言論の自由にはもちろん到っていない。イデオロギー担当政治局員ハーガー(Kurt Hager)も1965年11月9日、ビート弾圧の最中にもかかわらず問題は歌詞だとして、「我々は度量さを目立たせてはならない。ビート音楽についての我々の立場においても我々はきちんと識別しなければならない。ビート音楽で演奏し得る若干の歌は重要である。場合によっては米国の反戦歌がそうである」と語った(Rauhut 1993:132から再引用)。

青年コミュニケの翌年、1964年にビートルズのフランスや米国での公演があり、東独でもビート・ブームが起きた。長くその担い手となったレンフト・コンボ(Klaus Renft Combo、その後単にRenft Combo、1965年まではバトラーズ)の公演禁止もビアマンの影響を受けた歌詞が理由であった。

Mählert(1996:150)の青年コミュニケ評価<sup>3</sup>:

青年コミュニケは「かなり短期間にトゥルバのものと青年委員会が準備した」。「トゥルバの青年委員会議長抜擢は1963年7月であったから、約2ヵ月のみで青年コミュニケ案を作成した」。

その中では青年への対応において「子ども扱いや、叱る、指図すること」なしの新しい諸形態が大きな役割を果たし、「個人の発展、逸脱した見解とのフェアで事実に基づく討論による取り組みに道が開いたと思われた」。

「コミュニケは寛容と青年の個性・プライバシー尊重を宣伝した。セックスやモードの好み、ダンス音楽偏愛、並びに娯楽と交際といった若者特有の諸問題における頑迷さが過去のものとなるべきであった」。

しかし同時に、コミュニケは「SEDの綱領的資料に含まれる伝統的な社会主義教育原則を否定しなかった。かくて急速に、勤勉でイデオロギー的に従順で古風な道德イメージを持つ青年という理想像と、個人的な自己実現と近代的な生活様式についての提案の間の緊張関係が発生した」。

ウルブリヒトは「青年コミュニケ」に満足し(だから政治局決定とした)、その精神で1964年の第2次青年法を作らせた。その新青年法についての国家評議会での協議(1964年4月20日)において次のように、「新青年法についての若干の原則的な意見」を語った(Staatsverlag 1965:11f., 25):

「青年を信頼すること、労働や学習、自由時間における可能な限り最大の責任を彼らに委ねること、それは1つの同じ事柄の2つの側面」であり、それが「教育の困難を回避しあるいは克服するために最善の道」であり、「青年コミュニケの根本思想」である。

これが「理解され実現されているところではどこでも少なからぬ成果が存在している」。他方、「管理者や教育者が青年コミュニケを表面的、官僚主義的方法によって実現しようと試みるところではどこでも、困難や紛争があったし、ある」。

「だから私はここで断固として強調したい:青年コミュニケと新青年法は科学的に基礎付けられた近代的な社

会主義的な管理と教育の方法によって実現され得る！」

SEDの「中央委第5回総会<sup>4</sup>[1964年2月3-7日]で説明された新しい管理方法は経済だけではなく、全面的に青年活動の管理全体にも当てはまり、そしてそれはすべての国家管理機関やすべての社会組織にも該当する」<sup>5</sup>。「新しい管理方法をすべての生活領域で実現するためには青年の熱意と専門知識を利用することが重要である」。

しかし青年コミュニケが象徴する脱「教条主義・官僚主義」の時期は短かった。FDJ初代トップとして青年対策を主導してきたホーネッカーの反撃が1965年秋に表面化し、それに「皆伐総会」が続いた。その政治局報告者も彼であった。

### 3. 規制:1965年12月「皆伐総会」(中央委第11回会議)

1963年からの規制緩和は1964-65年のビート旋風で頂点に達したが、党中央内に次第に反発が強まり、1965年9月の西ベルリンでのローリング・ストーンズ騒動(一部ファンと警官隊の殴り合い)をきっかけに、東独ではビートファンが狼藉者(Rowdy)と呼ばれるようになり、10月から多くのビートバンドの演奏許可を取り消すビート弾圧が始まった。

そのため当時ビートの中心地であったライブチッピではビートファンと警察の間の「ビート騒乱」が発生、放水車も出動し、参加したファン500~800人のうち267人が連行された。

1965年秋の一連のビート弾圧はホーネッカーが主導したが、結局ウルブリヒトも追隨した(詳細別稿)。

ホーネッカーの心中には、自分の勢力圏であるはずの青年政策の主導権を奪ったトゥルバの追い落としという権力闘争の面もあっただろう。現に皆伐総会のあとトゥルバは青年委員会議長から失脚した。

ビート弾圧の直後、SED中央委第11回会議が1965年12月15-18日に開催された。

この会議は異例の規模であり、「中央委員会委員と同候補180人」だけではなく、「200人以上のゲスト(大臣、教授、大使、中央委部長、県評議会・県経済評議会各議長、[国営企業]総支配人、作家・芸術家)」も招集された。

本来の2倍以上の人数であったし、前夜には21もの「研究資料」が全参加者に配布された(補注1)。うち1つはウルブリヒトの長い報告の原稿で、残りはすべて文化政策関係であった。経済計画の審議も主要議題であったから、文化人以外に経済関係幹部もゲストに招集された。

第1書記ウルブリヒトは2日目に「1970年までの展望計画の諸問題」を報告し(Ulbricht 1969:663ff.)、初日の政治局報告はホーネッカーが行なった。

その中でホーネッカーが、文学・芸術における「非芸術や不道德」の一扫を声高に叫んだので、この会議のうちに「皆伐総会」(Kahlschlag-Plenum)の異名を持つことになった<sup>6</sup>。

「皆伐」(Kahlschlag)は森林の樹木を一度に全部伐ること(広辞苑)で、択伐の対語であり、clear-fellingに当たる。後述のように、例えば作家クリスタ・ヴォルフ(Christa Wolf)の異論がND紙に掲載されたのだから、ホーネッカーには異

<sup>3</sup> Mählertは青年コミュニケ採択を9月21日としたが、それはND紙での公表日であって、政治局決定は9月17日(火)である。公表が4日もずれ込んだ理由は知り得ていない。

<sup>4</sup> 公式には「総会」(Plenum)ではなく「会議」(Tagung)である。以下も同様。

<sup>5</sup> 同会議ではウルブリヒトが「社会主義経済法則を全国民経済再生産過程に適用する」と題する報告をした(Ulbricht 1969:389ff.)。

<sup>6</sup> このあだ名はAgde(1991)に由来する。この本の出版社は東独Aufbau Verlagの後継出版社である。

存のある命名であり、彼は択伐だと言いたいだろう。

しかし、「確固たる尺度を持った汚れなき国家」、「プチブル的懐疑主義に席はない」、「党一指導する力」と続く小見出しは、いかにも強圧的であった。そこでは広範な分野と多くの媒体に八つ当たりとも言える批判がなされた。

ホーネッカー報告のうち文化政策関係(16日付けのND紙によるSchubbe 1972:1076ff.)の主旨は:

まず、「社会主義の包括的建設の現段階」における芸術家の課題は、「社会主義的な人間の生活と世界像の豊富化、社会主義社会における闘争と勝利、紛争とその解決の描写」と、「資本主義的な過去」および「アメリカ的なセックス・プロパガンダや悪党賛美」のような「非芸術や不道徳の影響に対する決定的な闘争を必要としている」ことを強調した上で、こうした課題にそぐわない諸々の出来事を糾弾した。

小見出し「確固たる尺度を持った汚れなき国家」では一連の「社会主義に疎遠で有害な傾向と見解」を批判した。西独文化に影響された一部青年学生の犯罪行動、「アメリカの不道徳デカダンスの諸現象」に追随する軽芸術〔軽音楽、軽演劇等〕や娯楽分野、文学作品、さらに「残念ながらDT64における多くの番組<sup>7</sup>、映画制作会社DEFAの「若干の映画」などが取り上げられた。

次の小見出し「プチブル的懐疑主義に席はない」ではシンガーソングライターのピアマンを、彼は「プチブル的・アナーキー的社会主義」の観点から「激しい攻撃をわが社会秩序とわが党に向け」、「敵によってDDRのいわゆる文学的反体制派の旗手にされている」、その行動は「彼に高度な教育を可能にした国家〔東独〕だけではなく、ファシストたちによって〔アウシュビッツで〕殺された彼の父の生と死をも裏切っている」と批判した。

続く小見出し「党一指導する力」においては、著名作家ハイム(Stefan Heym)を槍玉に挙げた。

彼は「DDRの諸関係の不断の否定的批判者」であり、「彼に度々与えられた忠告を尊重する用意がない」。彼の小説「Xデー」<sup>8</sup>は「1953年6月17日の出来事」〔いわゆるベルリン暴動〕の「全く間違った記述ゆえに〔東独での出版が〕許可され得なかった」。

「社会主義はマルクス・レーニン主義的な闘う党によって指導される」が、ハイムは「労働者階級ではなく作家や科学者のみが新社会の指導に任じられるべきだ」と主張している。

「若干の雑誌や新聞」にも、「我々の社会主義的生活感覚とは何ら共通性のない小説や小説の抜粋が掲載さ

れている」。例えば〔FDJの〕「若い世界」(Junge Welt)、〔作家同盟の〕「新ドイツ文学」(Neue Deutsche Literatur)、〔自由世界〕(Freie Welt)<sup>9</sup>である。

〔このうち雑誌「新ドイツ文学」はブロイニツヒ(Werner Bräunig)の長編小説「ルンメル広場」(Rummelplatz)の抜粋(出版前の紹介)掲載が糾弾された<sup>10</sup>。これにはこの会議においてクリスタ・ヴォルフ(当時SED中央委員候補)がブロイニツヒと「新ドイツ文学」を擁護した(Schubbe 1972:1098f.)。政治局報告への反論であるにも関わらずこの発言も1965年12月19日のND紙の中央委記事の中に掲載された。〕

東独テレビ局<sup>11</sup>の「映画の選択には特に本年深刻な誤り」がある。西側社会批判という「名目」で「アメリカ的生活様式の不道徳やデカダンス、野蛮さが広められた」。

青年・学生の教育にも欠陥が存在している。等々。

報告は「ビート音楽」とFDJにも厳しい批判を向けた:

「DT64は長い間〔実際には1963年春以来の2年半にすぎない〕、その音楽番組で一面的にビート音楽を宣伝している」。その上「FDJ中央評議会の中にビート音楽の誤った評価が存在した」、すなわちビート音楽が「技術革命の時代の音楽表現」と位置づけられ、「若者たちに乱行を扇動するために敵がこの種の音楽を利用していることが見過ごされた。若者たちの思考と行動へのそうした音楽の有害な影響がひどく過小評価された」。

「上品なビート音楽には誰も反対しない」が、「最近西において優勢となり我々のところでも影響が見られるそのデカダンス的な性質は決定的かつ体系的に撲滅されねばならない」。なぜなら「そこからは青年の道徳的分解を助長し、せわしく興奮させる音楽が発生した」からである<sup>12</sup>。

このようにホーネッカーは自らの出身母体も激しく攻撃し、青年コミュニケと異なり、ビートについて歌詞ではなく曲のあり方自体を否定した。

だが1970年代初めには、再び歌詞のみを問題にすることに戻ることになる。1969年の青年調査の結果、指導部にとって青年掌握の危機的状況(FDJ、従って体制への青年の不満と離反)が明らかになったからである(青木 2019:32)。

その対策、とりわけ学校や職場と違って縛りの効きづらい自由時間対策として、「軽音楽」(ジャズ、ビート、ロック等)の活用が復活した。青年の好みへの妥協であった。それを1960年代末にラジオ、特に、皆伐総会で批判されたDT64が先導した(Rauhut 1993: 248ff.)。

<sup>7</sup> DT64は、西独青年との大イベント「ドイツの出会い1964」(Deutschlandtreffen 1964)に由来する東独青年に人気のラジオ放送。

<sup>8</sup> 「Xデー」はHeym(1974)の原稿である(Müller-Enbergs 2010:548)。東独ではようやく1989年にDer Morgenが出版。本書は著者の「自伝の1つ、決定的な1つである」(Heym 1988:786)。

<sup>9</sup> Freie Welt誌は東独の独ソ友好協会(DSF)編集であった。1989年1月1日に「紙不足」を理由に停刊となった(ZAIG 14922:Bl.2)。このシュタジ資料(第II局作成にZAIGが追記)は、1988年11月18日の東独でのソ連誌スポーツニク発禁へのADN(東独通信社)記者による批判を伝えた。

<sup>10</sup> これは作者のヴィスマート(Wismut)での体験に基づく「現実に即した」小説で、「新ドイツ文学」誌10号に事前掲載された1つの章をND紙が「勤労者とソ連のパートナーへの侮辱」として激しく批判した。「パートナー」とするのは彼が1957年から「ソビエト・ドイツ株

式会社ヴィスマート」(SDAG Wismut)の「若い作家活動共同体」(Arbeitsgemeinschaft Junger Autoren)に採用されていたからである。彼は批判の翌年に長編小説執筆を断念し、以後エッセーや物語、シナリオ、ルポルターージュなどを発表し、FDGB文学賞を得たこともある(Müller-Enbergs 2010: 170)。東独南部のヴィスマート社のウラン採掘量は世界有数であった。

東独は「核兵器のためのソ連のウラン需要の60%」を供給した(Schabowski 2009:167)。

<sup>11</sup> 当時の名前はDeutscher Fernsehfunk(ドイツテレビ)、1972年からFernsehen der DDR(DDRテレビ)に改称。

<sup>12</sup> 最近「中国宮廷ドラマ、放送中止に」と報じられた(朝日新聞 2019.02.13)。「共産党系紙」=「北京日報」によれば、それは「華美で享乐的」であり、「社会主義の核心的価値観と相いれず、社会に悪影響を与える」とのこと。まだやっている。

ホーネッカーの奪権後の1972年4月の「ダンス音楽会議」の席では文化相代理ラックヴィッツ(Werner Rackwitz)<sup>13</sup>がビートを高く評価した(Ruß 1976:427):

[東独の]ビートは「自作」曲によって生きていて、それらは「その聴衆、同じ心情の青年に直接伝え、自分を理解させたいという音楽家の欲求に発しており」、青年との「高い一体化の程度を達成している」。

これは、少なくともダンス音楽についてはラジオが先導した青年への妥協を承認したのであり、いわば青年コミュニケ回帰が生じたと評価し得る。

同時にこれは、ビート・グループが、1965年当時の批判に対応して、バンド名を英語からドイツ語へ、曲をカバーから自作へという土着化を果たした成果でもあり、また、**次節**にあるように、「タブーなし」への時勢の変化の反映でもあった。

その上で、第10回世界青年学生祭典(1973年夏)ではレントフをはじめとするビート・グループが圧倒的人気を博し、味を占めた当局はその後、政治的行事とロックを結合させることになった(「平和のためのロック」)(青木 2019:30)。

#### 4. 緩和:1971年12月「タブーは存在し得ない」(中央委第4回会議)

ウルブリヒトから奪権(1971年5月)後のホーネッカー(当時は第1書記)は、SED中央委第4回会議(1971年12月16-17日)における彼の結語(Honecker 1975:393ff.)において、「タブーは存在し得ない」と断言した。

結語のうちこの発言は、「主要課題には文化水準の一層の向上も含まれる」という小見出しのうちの、テレビ番組に触れた段落の次の段落にある(同前:426-429)<sup>14</sup>:

「わが第8回党大会[1971年6月15-19日]の批判的な言葉を受け入れ」てテレビ局が党書記局に、「もっと説得力のある政治的番組」や「感銘深いドラマチックな芸術」、「多彩な娯楽番組」を提供する長期構想を提示したことを歓迎する。テレビ局は「視聴者の諸欲求」を成果の基準とするなら「常に良き成果を挙げるだろう」。

第8回党大会以後に「多数の作家や芸術家」からそれぞれの団体[作家同盟など]や各団体内の党組織の中で、またND紙上で「述べられた諸意見にも、我々は特別の注意を払う。確固たる社会主義の立場(die feste Position des Sozialismus)に基づくなら、私の考えでは、芸術と文学の領域にはタブーは存在し得ない(Es kann keine Tabus geben)。このことは内容上の構成にもスタイルにも該当する」。

注目すべきは、このタブーなし発言が、「多数の作家たち」の「諸意見」への「特別の注意」の結果として語られたこと、つまり作家たちの要請への回答であったことである。このことは当時もその後も注目されていないが、タブーなし発言の位置づけを考える上で重要である。

こうした「特別の注意」がホーネッカーにタブー問題、従ってまた検閲問題に取り組みせ、それが彼のヘルムリンへの依

頼電話になったと考えられる。その電話はこの会議から数ヵ月後のことであった(5節)。

彼はテレビ番組について視聴者の満足を重視したように、文学でも国民の満足とそのため作家の創意を必要としたのだろう(8節の雪解け現象参照)。但し社会主義の枠内で。

音楽も同様だった。当時高い人気を誇ったレントフ・コンボのメンバーだったグレーザー(Peter Gläser)は「タブーなし」を聞いて次のように興奮した(Rauhut 1993:289):

ホーネッカーの発言によって「今やタブーがなくなると思われた時、我々の心臓は高鳴った。今や新しい時代が始まりこの国での生活を困難にした諸々も次第によくなるだろうと我々は信じた。なんと云おうと緩和のシグナルが多く存在した」し、「私は殆どの人がそう感じたという印象を持った」。

当時西独では「確固たる社会主義の立場に基づくなら」および「私の考えでは」という2つの限定条件を警戒しつつも、「タブーは存在し得ない」という思い切った言葉が注目された。

文化史家 Jäger (1982:136; 1995:140)<sup>15</sup>は当時、そのうちの「私の考えでは」に注目した。それは個人的意見としての不確実さを示したのか、党指導部の一致した決定がないことを示したのかと自問しつつ、意識的に曖昧にして文化政策「修正のテスト性格」を強調する意味でもあっただろうと言う。

この時点ではホーネッカーは奪権直後であり、まだ政権基盤形成の最中であった。そうであっても、中央委の会議において「私の考えでは」と言い、それが結語として認められたのだから、単なる「個人的意見」ではなかった。

「確固たる社会主義の立場に基づくなら」という発言は、1970年代前半の具体例に照らせば、緩やかな意味であった。その後引き締めめに転じたように、「確固たる社会主義の立場」と「タブーなし」の均衡点は変動したが、皆伐総会レベルに戻ることはなかった。

ホーネッカーへの交代は、「ウルブリヒト時代後期の狭量さ」に幻滅していた知識人たちが「新たな希望」を抱くのにふさわしかったし、「1970年代前半」の党と知識人の関係は党員かどうかに関わりなく「全般的に安定化した」。とはいえ党機関がコントロール権を手放すことはなく、「自律性」はあくまで相対的であって無制限ではなかった、と Jäger (1982:146; 1995:150)は評した。

但しホーネッカーが皆伐総会の政治局報告者であったことからの警戒心も知識人には残っていた(8節参照)。

同時に時代の急変も重要であった。東独知識人には「プラハの春」への支持とその軍事鎮圧、それに伴う緊張激化への批判が強かった。しかし1969年10月西独ブランド政権発足に伴う新東方外交の始動・進展によって東西間の緊張緩和と両独関係の急速な改善が進み、東独の外交関係が共産圏外に広がり始め東独当局に規制緩和の必要と余裕が生じた。

翌1972年秋に「承認の波」(西側を含む東独承認ラッシュ)が始まり、同年12月21日に両独基本条約が署名され(翌年6月21日発効)、東独の国際舞台への参加、それによる「世界に開かれた」国である必要と、そうありたいという願望

<sup>13</sup> 1969-81年文化相代理、その後1994年までベルリン・コーミッシェ・オーバー総監督(Intendant)、ハレ大学音楽学名誉教授(Müller-Enbergs 2010:1036)。

<sup>14</sup> Dokumentation(1972)にも結語の抜粋がある。結語のうちこの節のみは Ruß(1976:287-288)にもある(但し小見出しは省略)。同会議コミュニケは DA 2/1972:221 に掲載。

<sup>15</sup> 当時の DA 誌の著者紹介によると、西独エッセンやミュンスターの統合大学で「DDR 文学」について非常勤講師。最近の寄稿(クリスタ・ヴォルフ追悼ほか)では自由著述家。8節のリューレとは1950年代から関係が深く(イエーガーは当時ライブチツピで学んでいた)、リューレの突然死の際の追悼文を DA 誌に寄せた。補注2参照。



が強まり、それを東独は 1973 年世界祭典で実証しようとした。

歴史家 Schroeder(2013:251f.)は次のように概観する(ホーネッカーは「芸術と文学」という言い方だが、ここでは両方が芸術(家)に含まれている):

1971 年成立の SED 新指導部は、芸術家・知識人の「党へのより強い結合を目指し」つつも、「文化分野における限定された緩和を敢えておこなった」。すなわち「引き綱」を「より長い」ものにした。

だから「1960 年代には普通であった芸術家への攻撃が無くなった」し、SED 中央委第 4 回会議(1971 年 12 月)のホーネッカー結語が「ある種の“雪解け”の合図を出した」。彼はそこで、「私の考えでは芸術と文学の領域ではタブーは存在し得ない」と述べた。

この言葉の前置きには、「確固たる社会主義の立場に基づいていれば」という「強調」があったが、それでも芸術家たちに、党内の「特に狭量な田舎根性に反対する基礎を提供した」。

歴史家 Wolle(2013:331-335)は次のように言う:

「1970 年代初期は、「DDR という国が根本的に変化したと思われた時代」、「悪名高い第 11 回総会 [= 皆伐総会] に続く重苦しい 6 年間」のあとの「目覚め」であった。[こ記述は Plenzdorf(1995:7)に基づく。]

その「シグナル」となったのは、SED 第 8 回党大会やホーネッカーへの「唐突な交代」、東独「承認の波」、[それに伴う]大使館や特派員事務所の新設であり、ホーネッカーの「社会主義の立場に基づくなら、文学にはタブーが存在してはならない」[実際は「存在し得ない」という文句であった。この文句は「多義的」であり、「重要な制限」も伴っていた。

類似の発言はハーガーも中央委第 6 回会議(1972 年 7 月 6 日)で行なった[6 節参照]。これも自由化という「新路線の保証」とも、作家たちの行き過ぎへの「警告」とも受け取られ得た。

それでも、従来国内で出版できなかった「若干の本」が出版された(ハイム<sup>16</sup>や H.カント(Hermann Kant)の小説[Das Impressum(奥付)]など)。また「意味と形式」(Sinn und Form)誌上で「突然再び真の討論」が可能になり、「検閲の奇跡」も起こった。

すなわち、プレントドルフ(Ulrich Plenzdorf)の「若き W のあらたな悩み」が「意味と形式」誌に載った。これには反対意見が寄せられた[上記の「真の討論」に当たる。6 節参照]。しかし「以前の時代と違って」発禁にはならなかった。[単行本として Plenzdorf(1973)も出版された。]

またブラウン(Volker Braun)の、皆伐総会(1965 年)で弾劾された戯曲「Kipper」も「7 年後に印刷され、上演された」(単行本は 1988 年)。1975 年には幹部の娘と建設労働者の愛とシュタジの介入[たぶん「分解」作戦]を描いた「Unvollendete Geschite」(未完の物語)[邦訳は道家 1980 所収]が「意味と形式」誌に掲載された。ロミオとジュリエットの DDR 版であった。

「未完の物語」掲載について Spiegel(1975)は、「例が無いほど批判的かつ悲観的な DDR 像」を描き、「ホーネッカーの文化政策にとって寛容のテストになり得た」と評した。事実この掲載はアンソロジー企画を勇気づけた。

## 5. 1972 年 5 月ホーネッカーの依頼による作家ヘルムリン(Stephan Hermlin)の検閲批判

作家ヘルムリン(1915-1997)は 1995 年 4 月 13 日、彼の 80 才の誕生日に Hermlin(1995)を出版した。その冒頭に、1972 年 5 月作成の「覚書(Aide-Memoire):ホーネッカーのための文書」(同前:7ff.)がある(以下「覚書」と呼ぶ)。

これは「ホーネッカーの提案で、SED 中央委 7 月総会 [= 第 6 回会議]を顧慮して書かれたホーネッカーのための文書」(同前:109)である。

シュピーゲル誌は同書出版直後に、「覚書」の抜粋(Hermlin 1995a)とともに、その経過と主な内容を紹介した(Spiegel 1995)。紹介によれば:

1972 年のある日、ヘルムリンは、SED 第 1 書記で、「彼の古い KPD の同行者」たるホーネッカーから電話を受けた:「私は君に引き続き隅っこで黙って立ってはいもらいたくない」、「私のためにある文書を書く用意」があるか、と。テーマは「我々の文化政策の状況に関わる一定の事柄」、つまり検閲問題であった。彼は承知した。

そこで 1972 年 5 月、中央委第 6 回会議の少し前に書かれたのが「覚書」である。本人も忘れていた「覚書」のコピーを自宅地下室で彼の妻が発見し、彼の著書(Hermlin 1995)に収録した。

覚書の内容は「SED 文化政策の“グロテスクな”検閲の実情や他の不快さの怒り狂った決算」であった。しかし「ホーネッカーはこの挑発に全く反応しなかった」。

「隅っこ」とは、ヘルムリンが 1958 年以來 ND 紙に寄稿できず、ピアマンその他の「非教条的詩人たちの催し」を主催したため 1963 年に芸術アカデミー[の詩作・国語育成部]書記の「ポストを失った」こと(Spiegel 1995)を指している。

この「催し」は 1962 年 12 月 12 日の芸術アカデミーの抒情詩の夕べである。彼が組織したこの「夕べ」には「新しい詩人世代」<sup>17</sup>が参加した。彼は、それによる「党からの激しい批判と自己批判のあと、芸術アカデミーと作家同盟の役職を辞任」したが、DDR ペンクラブ理事であり続け(1962-1990 年)、1975 年から国際ペンクラブ副会長になった(Müller-Enbergs 2010:533)。

彼はすでに 1956 年の第 4 回東独作家会議で「サルトル、ヘミングウェイ、フォークナー、スタインベック[という米仏著名作家]の全作品の刊行を要求」し、「以後のエッセイの主要テーマは窮屈な文化政策の批判であり続けた」(同前)。

エッセイ集としては東独で Hermlin(1973)が出版された。その中の「意味と形式」誌によるインタビュー(S.241ff.)を例示すると、まず彼が戦前に共産主義青年団(KJVD)に加入した経緯について、「社会主義文学との出会い、世界経済恐慌の経験、そして労働運動との最初の結び付き」という「順番

<sup>16</sup> ハイムの従来発禁だった 3 冊の本(Plenzdorf 1995:11)である。そこに書名はが、「ラサール」(Lassalle、西独で 1969 年出版、その際罰金刑)や後述の「誹謗文書」、1972 年西独 Kindler から出版の「ダビデ王レポート」(Der König David Bericht)である。前二者は 1974 年、後者は 1973 年に東独でも出版された(Heym

1988:776, 846f.)。Kindler 社主(Helmut)はナチ時代にコンテ

ルンのために活動し、ハーバマン・グループと連携した(同前:776)。<sup>17</sup> ピアマン、ブラウン、グレスマン(Uwe Greßmann)、キルシュ夫妻(Sarah u. Rainer Kirsch)、イェンチュ(Bernd Jentzsch)など。

かと問われ、次のように答えた:

「おおまか」にはそうだが、「決して社会主義文学ではなかった」、「はるかにもっと多かった。それについては今日まで何も変わっていない」として、まず旧約・新約聖書、次いで詩人や英国の形而上学者を挙げ、「すべてのあり得る文学と我々が社会主義文学と呼ぶものとの間に壁は存在しない:文学は1つの大河である。…」。

この何年かあとにブレジネフは東独の「インターホテル」(西側ツールスト向け外貨ホテル)の客室に聖書が置かれていることさえホーネッカーに苦情を言った<sup>18</sup>。そういう共産圏で、彼は聖書や形而上学者など「はるかにもっと多く」が導き手だったし、「今日まで何も変わっていない」と語り、その上「壁は存在しない」という刺激的な言葉を使った。

そのインタビューがまず同誌 6/1971 に載り(隔月刊だからタブーなし発言の頃)、1973年の本書にも収録された。翌年その西独での出版<sup>19</sup>を東独出版社が許諾したが、それは東独文化省による承認でもある。また「覚書」の中でヘルムリンが未出版を問題したハイムの本「誹謗文書」も東独でも1974年に出版された(詳細後述)。彼の他の2冊の発禁本も1973年、1974年に出版された(脚注16)。

これらの出版はいずれも時代の雰囲気を示すとともに、ホーネッカーが「覚書」に少なくとも部分的には肯定的に反応したことの傍証でもある。だから彼は「覚書」に「全く反応しなかった」(上記シュビーゲル誌)わけではない。

しかもホーネッカーはヘルムリンの上記の経歴を承知していた。その上で、むしろだからこそ、文書作成を依頼したのであり、当然批判的内容の返書を予想し、期待もしたはずである。さもなくば依頼しない。だからこの依頼は「タブーなし」方針の具体化のためであったに違いない。「覚書」にはホーネッカーの期待を超えた部分(例えば戦争挑発や人種攻撃など以外の言論制限に反対)があるが、しかし少なくともこの時期のホーネッカーにとって、文化政策に採用可能かつ必要な具体的内容もあった。

また「覚書」は検閲批判とはいえ、検閲打破を行動に移したアンソロジー企画事件とは性質が異なった。

ハイムの「ラサール」の東独出版実現を Müller-Enbergs (2010:548)は、「SED 中央委第6回会議後の短い文化政策上の開放期間」に実現したと言う。同じことが彼の他の2冊にも言い得る。つまりヘルムリンが「第6回会議後の開放」に影響を与えた。

ヘルムリンが咎められるのは4年後、ピアマン追放抗議声明を組織した時である。しかし除名ではなく叱責に留まった。

ヘルムリンは東独文化界において「特別の役割」を果たした。それは、彼が「とりわけ、[体制内の]H.カントやホーネッカーとも、[ハイムなど]DDRの多くの批判的作家とも個人的に親しい」ことによった(Müller-Enbergs 2010:534)。

彼はケムニッツ[東独時代はカールマルクスシュタット]で1915年に生まれ、1931年にドイツ共産党系の共産主義青

年団(KJVD)に加入し、1936年亡命、エジプト、パレスチナ、英国、パリ、スイスに滞在し、1937-40年のパリ時代には自由ドイツ青年団[東独FDJの前身]のための活動もした。1945年9月にドイツに帰還し、西のフランクフルト・ラジオで編集者をしたあと、1947年にベルリンへ移住し、SEDに入った(同前:533)。だから Spigel (1995)は彼とホーネッカーを「古いKPD(ドイツ共産党)の同行者」と表現した。

「覚書」は「DDRにおける芸術、とりわけ文学の状況についての若干の、体系的ではない意見」を記すのだが、「肯定的な成果」はよく知られているので、「我々の文化政策の欠陥を1人の作家の経験と観察の視点から書き留める」ことにした(冒頭部分)。

東独の検閲制度はよく知られているし、検閲をめぐる攻防の実例もアンソロジー企画事件によって知ることができる。しかし検閲制度の運用実態の包括的な問題状況を教えてくれるのはこの「覚書」である。以下はその要旨である:

#### (1)「遺産の領域」と現代外国文学について(S.7ff.)

古典文学については「立派な施設」(Bibliothek der deutschen Klassiker)や「優れた」古典出版社(Insel-Verlagなど3社)がある。しかし「ドイツの重要な詩人の記念日」に新聞記事は出ても、彼らは「1945年以降全く出版されていない」。マルクスらの活動の前提でもあった「カントやヘーゲル、フィヒテ、シェリングの著作」は「全くまたは非常に限定された選択しか」利用し得ない。「ショーペンハウアーやニーチェ」は1行も印刷されていない。

出版責任者は「“遺産の批判的な受け入れ”のような決まり文句でそれを正当化」するが、「“批判的な”受け入れが受け入れを前提としていることだけを忘れている」。

「重要な国々の遺産」[の出版]も「殆どの社会主義諸国に遅れを取っている」。「東独の」外交関係に限られる<sup>20</sup>ことが「怠慢の言い訳」とされるが、逆の面、相手国への「文化的関心の表明が政治的関係を容易にする」ことを忘れている。

フランスでは「ある程度」DDR文学が知られたが、DDR側はそれに対応しなかった。西独、英国、イタリアなどとの関係も同様である。そのような「一方通行は芸術分野では何の価値もない」。「過去と現在の重要な文学が印刷されないのは文学のこの本質の間違った評価の結果である」。

それは現代西独文学についても同様であり、「科学的な」アブラカダブラの使用のもとに、西独文学をそこで支配的な社会体制そのものと同一視して退け、「DKP[西独にある東独系共産党]に近い2人か3人の作家」しか認めていない。

実際には西独では「過去15年に嵐のような活性化過程が進行し」、「2~3ダース」はいる「その最良の代表者たち」は「我々の潜在的同盟者だと判明した」。にもかかわらず彼らに「嘲笑と敵意」が浴びせられている。

これらすべての問題の原因は「わが党が長年決定権を2~3人の文化政治家に委譲したこと」にある。彼らは「破綻した芸術家、十分な個人的才能のない人たち」である。

<sup>18</sup> 1970年代末以来恒例のクミアでの会談で、ある時ブレジネフが「エーリッヒ、我々はDDRのイデオロギー状況を心配している」と言った。ホーネッカーは「仰天」したが、問題は東独青年団との交流にきたソ連コムソモール代表が宿泊したホテルの部屋に聖書があっただけであった。ソ連の客人ゆえわざわざ「インターホテル」に宿泊させたところ、それは通常は西側からの外貨払い客向けホテルのため聖書が置かれていたにすぎなかった。帰国後ホーネッカーは政治局会議で「同志諸君、私はあっちでそうしたばかばかしい話」

まじめに付き合わされた」とぼやいた(Schabowski 2009:165)。ライプチヒに1981年開業したインターホテル Merlur(現 Westin)は鹿島が設計施工し、日本庭園もあった(本号表紙裏面に写真)。

<sup>19</sup> Hermlin (1974)で、「BRD・西ベルリンと西側の外国についての Aufbau 出版社の好意ある許諾による」(S.4)。但し原書から「Braune Presse」など3つの節を省略した。

<sup>20</sup> 1972年秋までの東独承認国は共産圏と第三世界のみで、同年12月から欧米・日本などの承認ラッシュ(約60カ国)が始まった。

現代の「資本主義諸国の多数や第三世界」でも、「何十万、何百万の知識人(その中には殆どすべての有能な作家を含む)が左へ寄り、ますます労働者階級の側に身を置く」ようになっている。だから「現在の情勢は我々が他の国々の作家たちとの関係の改善に努めることを当然必要としている」。

「文化政策の最も重要な要因」は「継続性」およびその基礎としての「安定性と忍耐」であって、「変転する日々の政治的闘争の必要に機械的に従属させられてはならない」。

(2)「我々自身の文学」について(S.9ff.)

自国の文学にこそ「最大の欠陥」、すなわち「近年容認された狭隘化、度を越した検閲、あらゆる種類の操作」が存在し、「無関心、不機嫌、シニシズムを助長した」。

そもそも「社会主義国家が検閲措置を必要とするかどうかには議論の余地がある」。ブレヒトは「戦争扇動や民族・人種の憎悪攻撃」以外は、「社会主義では芸術と文学は自由であるべき」と主張した。「社会主義をただ単に巨大な検閲機械」と見る「かなりの人々」は「デマゴギー的にレーニンを引用する」。しかしブラウダ 1921年11月22日の記事は「極端なケースでさえレーニンの先入観のない、寛容な態度」を示した。

「もし彼が建国の母ローザ・ルクセンブルクの「異論の自由」も引用したら、ホーネッカーはどう思っただろうか。彼女の「異論の自由」は1988年1月から東独国民に広く知られた。」

「芸術作品の不許可は常に例外に限られるのであり、普通のことであってはならない」はずだったが、「近年、逆が現実になった」。「最も無害な事柄の出版でさえ検閲による変更希望によって延期された」。検閲官が「自分を一種の文学警察だと理解し、傲慢で脅迫的な言葉」を吐いた例もある。

また近年「いわゆる外部原稿審査係」が、「絶対的な匿名性」のもとに「本の生死を決定している」。作家同盟理事会が「この遺憾な状況」を「若干の出版社社長」に問題にしたが、ある社長が改善を拒否した。

「東独の制度では出版社の原稿審査係が検閲係でもあった。彼らは匿名ではなく作家たちに名前が周知であるのみならず、話し合いや相談にも応じた。但しその審査を通っても文化省出版・書籍販売本部<sup>21</sup>という検閲・出版の元締めの特許がないと印刷し得なかった。」

「この遺憾な状況」の例を自分の経験から示すと、「私は」1966年にレクラム(ライプツヒの出版社)の依頼でフランスのある古典詩人の選集をまとめたが、放置された。何度もの問い合わせの末に、「検閲官が異議を唱えている、異議[の内容]が私に通知されてはならない」という返事が来た。異議の内容を催促によって知ったが、「異議はばかげたものであった」。「私は文書でそれに論駁し」、あわせて匿名検閲官に「公的負担で卒業した大学でのフランス文学の勉強をやり直すように助言した」。「私のこの小さな本は4年以上遅れて出版されたが、検閲官の名前を私は今に至るも知らない」<sup>22</sup>。

「1966年は皆伐総会直後であり、この出来事もその方針の影響だろう。反ナチ闘士という尊重されるはずの経歴を持つ彼も当時は上記のように「隅っこ」にいた。「4年以上」後の本書出版は「皆伐」の空気の終わりを示している。彼にホーネッカーが「覚書」を依頼したのはその出版直後に当たる。」

現在の DDR 作家の場合には「類似の方法[による検閲]が[古典詩人の場合に比べ]より重大な影響を及ぼす」のであり、「実際にわが国のどの有能な作家も近年には検閲によって妨害されている。その結果は干からびる過程であり、無害さと大勢順応主義あるいはまた沈黙への逃避である」。こうした「破壊的な措置の影響はしばしば何年にもわたって残る」。いま是正しても「状況の迅速な改善は期待されない」。

「老若の一定の DDR 作家たちを世間から排除し彼らの名前を黙殺し彼らをいわば他の作家たちによって“代替する”ことが、何年来、試みられている」。排除対象のうちの「かなりは過去何十年も国内と国際的な労働者階級の闘争に参加し」DDR 成立の前提形成に寄与した作家たちである。

しかも「ここで問題なのは、正真正銘の腐敗の試みであり、それがもちろんここここで成功した」。作家として「かなりを腐敗させることができ」、「社会主義国家ではそうしたことはあるべきではないが、我々は近年そうした出来事の証人になった」。「それは皆伐総会での出来事である。」

「第11回総会[皆伐総会]で、ある有名な劇作家が、彼のための席の形成と、「より重要な劇作家を我々の舞台から追放」することを訴え、「ある指導的同志」が「我々はあなたを理解する！」と野次った。この経緯は「今日なお ND 紙で読み直すことができる」。

「事実彼は理解された—彼の昇進はそれ以後保障された」。後者の「劇作家の脚本はパリやハンブルク、チューリッヒ、ニューヨークで見られ得たが、DDR では見られなかった」。

「腐敗した作家たちが検閲官たちと協力している」例もある。少し前に[文化省の]出版・書籍販売本部で「2人の有名作家」が H.カントの「Impressum」の引き下ろしを要求した。

さらに「多く的手段が使われている。長年 DDR の作家たちが載ったブラックやグレーのリストが存在している」。彼らは他の社会主義諸国でも出版できず、「兄弟国家の関係が、作家たちを自国だけではなく社会主義の外国でも孤立させる選別操作のために乱用されている」。

この選別は秘密ではなく、「ND紙の文化面」に「どのような名前を見出すか、どのような名前を見出さないか」によって分かる。「[当局が]妨害し得なかった一定の作家や芸術家の他の真の成果は意識的に隠されている。それらはもちろん本当は DDR の真の成果でもある」。

創始者の意図が「教育的」措置であったとしても、「実際は、これらの行動が人間の尊厳を侵害し、低級な本能に訴え、共和国[DDR]の評判に損害を与えている」。

この損害には、「西側諸国との文化的な結び付き」の操作も含まれる。それらの国への代表派遣は本来「当該諸国を知り、母国語だけを話すのではなく、とりわけそれぞれの国で尊敬されている人たち」であるべきだが、「かなりは明らかに褒賞との関わりで」派遣されている。

また、「今日までハイムのような反ファッショ闘争で定評があり国際的に認められた作家の新しい本(複数)が出版されないこと」が納得できない。これらは「芸術的にも政治的にも価値が高いし、ハイムが彼の有名な“十字軍参加者”や他の諸作品の中で何十年来主張してきた同じ立場を主張してい

<sup>21</sup> Hauptverwaltung (für) Verlage und Buchhandel. 組織名は建国当初の文学局、1956年から出版制度本部、1958年から文学・書籍制度部を経て1963年から1989年まで出版・書籍販売本部と変遷した(Walther 1996:39)。

<sup>22</sup> 似た様子は匿名に守られた査読付き学会誌についても聞く。私

も、題材自体を全く混同した査読者の全否定に直面したことがある。査読者は読解力相応に判断しただけで、匿名かつ責任は問われない。編集者の対応が重要だが、中身なしの官僚答弁のような対応であった。我々の場合は代替選択の可能性があるが、独裁国ではそれが困難であった。

る」からである<sup>23</sup>[だから近著だけ発禁はおかしい]。

デフォーを扱った近著「Schmähschrift」(誹謗文書)は「素晴らしく書かれた」。ところが「我々のところの検閲官階層」はこれを出版禁止にした。ハイムに限らず「実際にはずっと多くの作家たちがそういう目に遭っている。[ヘルムリンのこの抗議の2年後東独でも出版。5a節に詳細。]

検閲問題の解決には「粘り強さと気力」が必要だが、加えてSED中央委員会の組織変更も「有益」だろう(但し人員変更ではない)。なぜなら中央委の「芸術・文学部と科学部が同一の目標を追ってはいない」し、出版社については科学部が科学関係も文芸関係も「指導」しているのは「不条理」であり、しかも「科学部は作家たちに必ずしも友好的に接していない」からである。(要旨完)

ホーネッカーは「覚書」を、中央委第6回会議の文化政策報告者でもあるハーガーに見せただろうと推測するが、想定以上の激しい批判ゆえに自分の胸に納めたのかもしれない。

## 5a. ヘルムリンの検閲批判に関連して:ハイム(Stefan Heym)の『誹謗文書または女王対デフォー』発禁理由

前節末尾にあるハイムの短編『誹謗文書』の正式表題は「誹謗文書または女王対デフォー」(Die Schmähschrift oder Königin gegen Defoe)(英語版は単に The Queen against Defoe)であり、1970年にスイスのDiogenes社から出版された。東独では、ヘルムリンの上記の指摘の2年後、1974年にレクラムから出版された。以下単に本書と呼ぶ。

体制転換後のその増補版の「あとがき」には、本書はフィクションだが、[ロビンソン・クルーソーで有名な]デフォーが「教会のドグマの不合理的」を批判した史実(1703年)に基づいたとある(Heym 1993:94)。

このあとがきは、東独で本書を当初発禁とした「鑑定書」の内容を明らかにした。あとがきには(抜粋・要旨)：

「革命」(Umsturz)[=1989-90年の東独体制転換]の「長所の1つ」は秘密資料が明かされることであり、本書を発禁にした「出版社の鑑定書」も明らかになった。[この場合の鑑定人は出版社の原稿審査係ではなく前節でヘルムリンの言う匿名の「外部原稿審査係」である。]

出版のための用紙割り当て申請ないし発禁とする場合に、出版社は「文化省の担当部門」[出版・書籍販売本部]に「できる限り専門家」による「鑑定書」(Gutachten)を提出しなければならなかった。これは「検閲の予備段階でもあった」。本書に関する鑑定書によれば：

本書は「文学的見解の“絶対的自由”」という立場から、「視野が狭く頑迷な(つまり教条的な)国家と教会(つまり党)の代表者たちに反対する」ことを擁護した。

「陰險なほのめかし」が至る所にある本書は、「言葉の最も本当の意味で誹謗文書、我々に反対する誹謗文書である！」。本書の内実が「わが党とDDR政府、とりわけ1965年の第11回総会の文化政策に対する攻撃」であることは、登場人物を見れば明らかである。

すなわち語り手[かつデフォーを有罪にした男]の雇い主であるノッティンガム卿は、「全く明らかに同志・教授ハーガー(Hager)の戯画化された人物」であり、そのことは卿が「やせこけた」(hager)人物とあることから分かる。デフォー訴追のための秘密工作の資金繰りをするゴドルフィン卿はホーネッカー、「亡きウィリアム国王」は[初代大統領]ピークと考えられる。1703年がとなっているのは各桁の数字を足すと11となり、「第11回総会！」を示すためである(ほかに8月3日、1月10日、4月7日も)。「[本書の中に多数ある日付から懸命に、足し算が11になる日付を探したようである]。

この鑑定の結果、本書は「エルベの東[=東独]では[1974年までの]4年間出版されないままであった」。

「今では彼のような者を笑い者にすることができる」が、実は、「この男の言うとおりで、1703年のロンドンでの出来事」と1965年のSED中央委第11回総会[皆伐総会]の出来事との「はっきりした類似性」に刺激されて、私は「デフォーと彼の誹謗文書の結果」を書き、読者が「政治運動を促進することを望んだ」。鑑定人も国民が「批判的な作者」を支持するかもしれないという懸念を抱き、その不安の産物がこのような鑑定書であった。

比類なく「徹底的に組織され、官僚主義化された」警察・保安体制は、実は「実際に敵がいる所ではなく間違った場所、すなわち自分の胸と自分の脳の中に敵を求めた」[つまりあれもこれも敵だという妄想]。「抑圧の代わりに…言葉の自由や若干の他の自由を与えるべきであった」。

しかし今や「支配階層とその機構の特別な振る舞いは旧DDRにのみ存在したのかどうかを我々は問いたい」。

ハイムが歴史上の事件を題材に体制批判を描いたのは、本人が認めるとおり(後述)、事実であり、鑑定人は洞察した。しかしそれが当然発禁の理由になるという鑑定人の思い込み、それを生む体制こそが問題であった<sup>24</sup>。

それにしても鑑定人が、本書にある多数の日付の一部に過ぎない無意味な数字遊びまで挙げたのは、私見では、「1703」は史実だと反論される可能性があり、皆伐総会へのこじつけの証明数字の追加が必要と思ったからだろう。

ハイムは、本書が1974年に東独でも出版されたにもかかわらず、それについて「4年間出版されないままであった」としか触れなかった。本書が4年後に、なぜ、誰が鑑定書を覆して、東独で出版されたのか、その出版の意義は何かなども検討すべきであった。

ホーネッカーに本書の発禁への苦情を伝えた上記の「覚書」を、ヘルムリンと個人的に親しくてもハイムは知らなかったかもしれないし、「覚書」が再発見されたのは、このあとがきよりもものちのことではある。しかしハイムは発禁の事情を調べたのだから、発禁撤回の事情も調べるべきであった。

本書の発禁撤回は、やはり、「タブーなし」という政治方針を背景に、ヘルムリンからホーネッカーへの上記の苦情申し立てをきっかけとして、本書の題材があくまで、自由を求めるデフォーとアン女王・教会の対立であって、直接の党指導部

<sup>23</sup> 「十字軍参加者」(Kreuzfahrern)は、「The Crusaders. A Novel of Only Yesterday」(米国1948)、「Kreuzfahrer von heute」(東独1950、別名で西独1950)である(Heim 1988:846)。

<sup>24</sup> ここで想起されるのは中国文化大革命の口実の1つとなった「海瑞罷官」である。その作者呉晗は悲惨な最期をなしたが、ハイムの場合は有罪にさえならず、逆に発禁解除となった。この差異には事件の性質の違いに加えて、国際世論を気にしない中華大国主義と

東西ヨーロッパの狭間で揉みくちやにされる小国の違いや、個人崇拜や暴力的権力闘争の程度ないし有無を含む両国共産党の体質の違いも作用しただろう。1989年には東独議会が中国共産党の暴力的天安門処理を支持したが、秋のライブチヒ大規模デモへの暴力的介入はなかった。もし東独当局が暴力的介入をしても、内外の圧力でSEDの統治は不可能になっただろう。中国共産党はその後も安価な労働力と巨大市場を武器に外資を呼び込むことができた。

批判ではないことを勘案した結果だと考えられる。いわゆる「中央決定」による出版であったかもしれない。

## 6. 1972年7月中央委第6回会議

作家フューマン(Franz Fühmann)<sup>25</sup>は、1977年12月19日に政治局員ハーガーに対して次のように述べた(ハーガーのホーネッカーへの報告による)(Walther 1996:85):

「中央委第11回会議 [=皆伐総会] とそれ以前には、「文学にとって一種の“氷河期”が存在した」が、「第8回党大会 [1971年6月] と中央委第6回総会後には、また第9回党大会 [1976年5月] 後にも、彼も他の作家たちも、今は文化領域での本当の民主化—彼は“自由化”と言うつもりはない—が始まったという意見であった」。

「第6回総会」が名指しされているのは、会談相手のハーガーがその会議の文化政策報告者であったからだろう。フューマンが自由化と言わず、民主化と言う理由は分からないが、私見では上記のとおり自由化である。

中央委第6回会議(1972年7月6-7日)においてハーガーが行なった文化政策報告の中には次のようにあった:

「革命的なドイツ労働運動の反帝国主義闘争は美学的・芸術的に常にリアリズム、とりわけ社会主義リアリズムのための闘争であり、ブルジョア的近代主義に対する闘争である」。このことが「わが党の、歴史的実践によって完全に確証された闘争経験である」のだから、「我々が、社会主義リアリズムのすべての可能性の広さと多様性に、この方向での創造的探求の大きな自由の余地に断固として賛成を表明する場合、そのことはブルジョアイデオロギーと帝国主義的芸術論への一切の譲歩を排除する」(Rüß 1976:508)<sup>26</sup>。

これは Wolle (4節の引用)にあるように、どちらとも取れる。力点を「広さ、多様性、自由の余地」に置くか、反ブルジョアイデオロギーに置くかで、政策には大きな差が出る。

この時点ではこの文句は、ホーネッカーの限定付きタブーなし発言と同じ趣旨であったと受け取られたし、実際そうであった。Schroeder (2013:252)も、この会議も「芸術家を色々な点で勇気づける」ものであったと評した。

中央委第6回会議を間に挟んで論争になったのが、上記のプレントドルフの『若きWの新たな悩み』であった。

これが「意味と形式」誌1972年第2号に載ると、編集部が激しく非難された(Jäger 1982:149; 1995:153)。しかし翌年本としても出版された(Plenzdorf 1973)。

この小説について Wolle (2013:332f.) は、「ゲーテのヴェルテルという題材をDDRの日常に翻案し、若い個人主義者ヴィボーがいかにして社会環境が原因で破滅したかを描写した。主人公の抵抗は狭義の政治的なものではなかったが、彼のいきり立ちや破綻が文化政策ドクトリンの土台に触れ」、非難の声が上がったが、「しかし以前の時代と違って、そうした批判はもはやだちに発禁にはならなかった」と言う。

Schroeder (2013:252f.) も、この作品には「多くの青年の視点から目に見えるようになる、かさぶたになったDDRの諸関係への批判」があるため、「例えばスター弁護士カウル(Friedrich Karl Kaul)のような若干の著名な党の同志たちを怒らせた」が、「カウルのこの見解は、党指導部における批判的な文学と芸術の評価の中では認められなかった」と言う。

論争時のカウルの見解はJäger (1982:149f; 1995:153f.) に詳しい。その主旨は、この作品によって「退廃的で行動障害のある青年が社会主義文学の肯定的な英雄に仕立て上げられている」ので「吐き気を催させる」と非難し、意味と形式誌の「編集部を“社会主義の実際と発展の重大な歪曲”を指摘さしなかつた」と責任追及することであった。

カウルらの非難があっても出版することができたプレントドルフは、この時期の自由化を実感したと同時に、自由化をより確かなものにするためには検閲打破という、さらなる自由化が必要だとも考えただろう。

そのための行動を彼はシュレジンガー(Klaus Schlesinger) やシュタデ(Martin Stade)、ヴァルター(Walther 1996の著者)、ハイムらとともに、1974年初めから具体化する。そのための相談は当然すでに遅くとも1973年に終えていたことになる。アンソロジー企画である。

ハーガーに対するフューマンの発言(本節冒頭)には続きがあって、「最近」 [=1976年11月のビアマン追放以後]、「最大の不快感を引き起こす新たな事象」が起こっていると苦情を申し立てた。

このように第6回会議の4年後の秋に舞台は暗転することになるし、その直前にアンソロジー企画がシュタジと作家同盟によって阻止された。

## 7. 1973年5月SED中央委第9回会議

中央委第9回会議(1973年5月28-29日)の初日にホーネッカーが政治局報告をした(Honecker 1975a:227ff.; SED 1973)。第10回世界青年学生祭典開幕のちょうど2ヵ月前であった。

報告は文化政策について、「タブーなし」を語らず、その前提とされた「確固たる社会主義の立場」、あるいは「不動の社会主義の立場」(unverrückbar sozialistischer Standpunkt)を強調し、「若干の新しい作品、特に映画・演劇芸術の作品の欠陥や不十分さ」を問題にした(Honecker 1975a:276,278)。

しかし他方で、名指しはなく、「諸芸術家同盟やDDR芸術アカデミーがそうした問題についての創造的な議論をすることによる解決を期待するに留めた(同前:278)。

彼は、両独基本条約発効を間近に、総力を挙げて準備中の世界祭典を2ヵ月後に、さらに国連加盟を数ヵ月後に控えて、強圧措置を取ることはあり得ず、むしろ「世界に開かれた」ソフト路線を印象づける決意をしていた時期であった。

これについて Jäger (1982:157; 1995:161) は、「実射撃

<sup>25</sup> 1922-1984。敗戦から1949年までソ連抑留、そこで「反ファシズム中央学校」(Antifa-Zentralschule)教師も。帰国後NDPD(ドイツ国家民主党)入党、幹部経験も。1953年作家同盟幹部会員、1954-1959シュタジIM(密告者、暗号名Salomon)。1955年ハインリッヒ・マン賞。1972年NDPD脱退。1976年ビアマン追放抗議声明共同署名者となる。シュタジのOV(作戦事案)「詐欺師」(Filou)の対象に。圧力強化に対して1977年に文化省出版・書籍販売局長ヘプケ(Klaus Höpcke) [検閲・印刷許可の元締め]宛て

の「公開書簡:真実の喜び」発表。同年作家同盟指導部がザラ(Sarah Kirsch)の移住を促したために脱退。翌年作家同盟幹部会除名(Müller-Enbergs 2010:360f.)。

<sup>26</sup> 全文がRüß (1976:493ff.)に、II・III章のみHager (1972:986ff.、引用該当はS.988)に所収。構成は、I章「発展した社会主義社会における文化の役割」、II章「文学と芸術は我々の生活を豊かにする」、III章「文化的伝統の保護」、IV章「社会主義的文化・芸術の発展の指導責任の高まり」である。

ではなく「最初の警告射撃」とし、「慎重な定式化」、「マイルドな」攻撃、「扇動的であろうとはせず」に「作家たちの「逸脱行為」のための弁明理由を自ら探した」と評した。

ちなみに Jäger(1982; 1995)の東独文化政策史区分は以下のとおりである(1982版には1981-1990の項はない):

- 1945-1949:反ファシズム再出発の疾風怒濤
- 1949-1953:計画に基づくイデオロギー化
- 1953-1958:スターリン死後の危機と路線の動揺
- 1958-1964:ビッターフェルドの道の蛇行とイデオロギー的共存をめぐる争い
- 1965-1970:ウルブリヒト政権晩期:文学の解放(Emanzipation)への抑圧反応
- 1971-1975:第8回党大会後:古いタブーからのホーネッカーの限定された離脱
- 1976-1981:ビアマン追放と、イデオロギー的露骨さに代わるプラグマチックな恣意
- 1981-1990:没落に抗して:戦略構想なき混沌とした文化政策。

1973年にはクンツェ(Reiner Kunze)の詩集「青い封印の付いた手紙」(brief mit blauem siegel)が「ようやく国内で」出版され[ライブチヒのレクラム]、初版も第2版も各1.5万部がすぐ売切れた(クンツェ1982:176 訳者あとがき<sup>27</sup>)。

クンツェは1968年に「プラハの春」鎮圧に抗議してSEDを脱退し、シュタジのOV「Lyrik」(作戦事案「抒情詩」)の対象となり、翌年第6回作家会議では西独で出版した彼の詩集「Sensible Wege」が激しく攻撃された(Müller-Enbergs 2010:750)。OV抒情詩はクンツェ(1992)に詳しい。

そのためクンツェは1968年に「事実上の出版禁止」となっていた(Wolle 2013:333)。

ところが詩集「青い封印…」が1973年に東独で出版された。それは「妥協に基づいて」実現した、つまり一部の原稿は「引出しに留められた」、従ってこの本は当局にとって「リベラルなイチジクの葉として悪用」されたと言った(Wolle(同前)は言う)。

これは、本書は自由化の証明として当局に悪用され、クンツェは出版実現のために一部原稿の取り下げ、つまり検閲容認という「代価」を払ったという批判である。しかし「代価」を払ってもその出版に言論の自由の幅を広げる内容があれば意義があり得る。それが当局の「代価」になるからである。批判が妥当かどうかは収録・未収録の両原稿の検討に依存するが、Wolleにそれはない。

ブラウンの上記の「未完の物語」は当局の許容の限界を突き止めたとして高く評価され、アンソロジー企画に「強い刺激」を与えた(Plenzdorf 1995:242ff.所収の1975年11月28日付けシュタジ大ベルリン支部第XX/7部「中間報告」)。「青い封印…」も同様に、そうでないかが問われるべきであった。

Wolle(同前)は、クンツェと違って当局による「悪用」の「すべての試みに妥協しなかった者の中では、とりわけビアマンが抜き出ていた」と評価し、そのため彼は追放されたと言った。

しかし1976年11月、ビアマン追放直前にクンツェにも苦難が襲った。彼は国内で出版できなかった「素晴らしい歳月」(Die wunderbaren Jahre、邦訳クンツェ1982)を東独当局の許可を得て西独で出版した。ところがこの作品による東独

社会主義誹謗により作家同盟除名となった(クンツェ1982 訳者あとがき)。彼自身とその家族への抑圧を受けて1977年4月には西独へ出国した(Müller-Enbergs 2010:750)。

上記引用の文脈の中でWolle(2013:333)は、「1970年代半ばの文化政策の雰囲気は慎重に成り行きを見る状態であった。どの時点でSED指導部の寛容が逆転するかを原稿審査係も文芸部員も、国家決定の担い手も知ることができなかった」と言う。しかし共産圏において作家が政治の「成り行き」を見守るのは常のことであった。むしろ当時は作家たちの中に自由化の享受と一層の推進という気持ちもあり、その象徴がアンソロジー企画であった。

当時Spittmann(1973:567ff.)がこのホーネッカー報告を論評した。著者シュピットマンは、DA誌創刊(1968年)から1994年までその編集責任者であり、しかも多くの論評による内容上の貢献も大きかったと評される(Bleek 1995)。

彼女が同報告について注目したポイントは以下のようであった。対ソ同盟などの国際関係や、一部を除く両独関係などは省略する。引用の際の“ ”内は彼女のホーネッカー報告からの引用である。分かりやすくするために私の注記の一部を□内挿入ではなく、行頭を戻して記入する:

この報告は中央委の前回会議以後だけではなく2年前の第8回党大会からの全期間を振り返った。[その意味での重要性がこの報告にはあった。]

その際、彼がウルブリヒトの「新経済制度」(NÖS)を葬り、「事実上の奪権」を果たした「1970年12月の第14回総会を新たな成果、豊かな経済政策の始まりと評価し」、さらに経済政策の、第8回党大会以後の“全面的かつ徹底的な変更”を誇った。[“ ”内の文は Honecker 1975a:260にある。]

こうして彼は「慎重に彼の前任者ウルブリヒトと自分を区別した」。この慎重さは、[この直前、1973年5月12-13日に]ブレジネフが東ベルリンを訪問した際にウルブリヒトに敬意を表明したからである。

この「敬意」は、ホーネッカーへのレーニン勳章授与(同13日)の際にブレジネフが、「同志ホーネッカーは長年、ピーク(Wilhelm Pieck)[東独初代・唯一の大統領]やグロテヴォール(Otto Grotewohl)[東独初代首相]、そして我々すべてが尊敬する同志ウルブリヒトのようなドイツ・国際労働運動の優れた人物たちと協力してきた」と、ウルブリヒトを特筆した(Dokumentation 1973:649)ことを指す。(紹介に戻る)

「一見、この政治局報告にはドイツ問題に関して新しいことは何もないと思われる」が、「詳細に見ると、若干の新しいニュアンスが発見され得る。それらは戦略的構想の変化ではないにもかかわらず、注目に値する」。

それは西独との「イデオロギー的対立の2つの主要な単語が突然消えている」ことである。1つは両独間の「隔離」という言葉、もう1つは「敵対的なイデオロギーとしての社会民主主義」という言葉である。後者は「社会修正主義」(Sozialreformismus)に置き換えられた。この言葉は「ブレジネフの東ベルリン訪問についてのコミュニケーションの中で初めて浮上した表現である」。

加えてホーネッカーは、「今や再び[両独間の]言語

<sup>27</sup> 訳者あとがきには「彼の詩の朗読会は熱烈な若い支持者たちであふれた」ともある。クンツェ財団のウェブサイト [https://reiner-kunze.com/include/Brief-mit-blauem-Siegel/brief-mit-blauem-siegel.inc\\_wp.php](https://reiner-kunze.com/include/Brief-mit-blauem-Siegel/brief-mit-blauem-siegel.inc_wp.php)にある1974年ライブチヒ・ゴース邸

でのそのの写真は残念ながら「熱烈」でも「あふれた」様子でもない。それでも写真の場合も、主催者が招待客限定としたにもかかわらず、人々が入口に詰めかけたため、クンツェが要求して彼らも入れさせて開演した。

や歴史、文化の共通性を明確に確認し、それによって「以前の立場を変えている」。

しかし彼の強調点は、米英豪やオーストリアとドイツを例に、「言語の共通性」が必ずしも「共通の1つの国家」になるわけではないことにあった(Honecker 1975a:240)。その際に彼は、これらの例と両独分割とでは歴史的経緯が異なる(自力分離と他力分割)ことを無視した。

東独では西独の放送を「誰もが好きなように」視聴することができる、彼が「付随的」に述べたことも「注目すべきである」<sup>28</sup>。これまでも西の放送の視聴はそれだけでは犯罪とされなかったが、「政治的迫害や差別の理由」となり、またなんらかの不法行為が摘発された際の刑罰が重くなっていた。だから「政治局全体の権威」の付いたこの「ホーネッカーの表明」は、西の放送の視聴の「政治的正当化に匹敵する」。

これは、ホーネッカー報告のうち、「西側のマスコミ、とりわけ我々のところでは誰もが好きなように付けたり消したりすることができる」ところのBRD〔西独〕のラジオとテレビは、そのことを秘密にしていない(Honecker 1975a:235)に当たる。この引用にある「そのこと」は、西独が基本条約などを「彼らに有利なやり方で解釈しようとしている」ことを指す。

彼女が注目すべきだとした部分は、独立の主題としてではなく、「BRDのラジオとテレビ」を修飾する関係文として述べられた。だから、彼女はこれを「付随的」表現とした。ホーネッカーは、東独では西の放送を従来から好きなように視聴できているのだということを強調したかった。

この問題が今後どうなるかは、「SEDがこの“好きなように”という言葉をもどくように解釈するか」によるが、「いずれにせよその裏にはかなりの断念も隠されている」。東独住民から「西の放送を排除することに成功したことがないからである」。

文化政策については、「第8回党大会後の党の指令が許した相対的に広い自由の余地が、ホーネッカーの寛容の限界を明らかに越えた作品や議論によって満たされた」。

そのためホーネッカーは「再び自由の余地を狭めている」：“確固たる社会主義の立場”を強調し、その“立場からのみ—そして周知のようにそこには社会主義的倫理も含まれる—結局は完全に文化的創造性が展開されるだろう”。「ホーネッカーは形式では穏やかに、しかし実体では非常にはっきりと、生意気な芸術家たちをイデオロギー的な制約の中に戻るように指示している」：

“若干の新しい作品、特に映画・演劇芸術の欠陥や不十分さの原因はいずれの場合にも芸術的な弱さにある”。“色々な演劇や映画の中で描かれている孤独や人間の社会からの孤立、社会的諸関係に関する人々の匿名性はすでに今、そうした作品の基本態度が芸術と文学への社会主義の要請と対立していることをはっきりさせた”[Honecker 1975a:276ff.]<sup>29</sup>。

ホーネッカー報告には、「確固たる社会主義の立場から非常に色々なテーマで、非常に色々な表現様式において展開

し得る文化的創造性のための広いフィールド」が形成されている、ともある。彼女はこの発言も、「再び自由の余地を狭めている」ことの例証とした。

しかしこれは内容と形式の多様性の強調とも解釈することができ、彼女の解釈は早計である。タブーなし発言や第6回会議のハーガーなどと同様に、どちらとも取れる言葉が使われるので、実情に即して判定しなければならない。

上記のようにこのあと従来の禁書が出版され、「未完の物語」が載り、いずれも問題にされることはなかった。だからこの時は引き続き緩和、自由化の方向にあったと判定し得る。世界祭典実施に向けて開放的な空気が広がる時期でもあった。

この時期の文化政策についての彼女の見方は、Jägerの上記の穏当な見方に比べると、厳しい見方であった。

彼女が注目した「社会修正主義」という新用語について付言すると、中央委第9回会議において「社会修正主義」という言葉は政治局報告にはなく、同会議での政治局員ハーガーの発言にある(Dokumentation 1973a:775)。ハーガーは対立イデオロギーに「毛沢東主義」(Maoismus)も加えた。

ホーネッカーはSED郡第1書記を集めた会議(1973年10月26日)でこの言葉を用い、「右翼日和見主義」と同義とし、「帝国主義がその守勢から脱出する試み」の際に「特別の役割」を果たすと述べた(Honecker 1975a:422)。

ブレジネフの東独訪問の際の「コミュニケ」は、「諸共産党・労働者党の協力」の課題として、「特にマルクスやエンゲルス、レーニンの理念の宣伝と実現およびブルジョア的イデオロギー並びに社会修正主義、右と“左”の日和見主義に対する断固とした闘争」を挙げた(Dokumentation 1973: 655)。

中央委第9回会議とその直前のブレジネフの東独訪問は、両独基本条約が、西独野党の猛反対を抑えてまもなく発効する(1973年6月21日)という時期であった。西独社会民主党権が尽力した同条約は東独を、行政法上とはいえ、国家として認め、国連加盟に道を開いたのだから、「社会民主主義」はもはや「断固とした闘争」の対象ではなかった。

このような西独政権への配慮は、文化政策のあり方とも無縁ではなかった。

## 8. 1973年6月リューレ(Jürgen Rühle)の見方

DA誌のリューレへのインタビュー(Rühle 1973)を紹介したい。インタビューの日付の記載がないが、中央委第9回会議後であり、かつ7月号掲載ゆえ、上記のように1973年6月と推測した。第10回世界祭典のほぼ2ヵ月前である。

当時西独ケルンの地方テレビ局WDR(西部ドイツ放送)東西関係編集委員であった彼は、1955年まで東独のBZ紙(ベルリン新聞)学芸欄を担当し同地の作家たちと交流し、東独の文化と文化政策の内情を知悉していた(詳細は補注2)。

SED指導部交代(1971年5月)により文化政策に変化があったかと問われ：

「明らかにそうだ。文化政策上の変化はすぐに明らかになった。それを私はコントロールされた雪解けと呼びたい。ウルブリヒトのもとでは抑圧されていた作品や人物

<sup>28</sup> 国境沿いの送信網から送られる西独テレビはARD(公共第1テレビ)が東独視聴世帯のほぼ90%をカバー(公共第2テレビのZDFは少し減少)。ドレスデンとグライフスヴァルトの各周辺のみ受信不能、ライプツヒヒやマグデブルク、ノイブランデンブルクなどが受信可、他の全域が受信良好であった(青木 2009:137、Holzwei-

ßig 1989:69f.による)。

<sup>29</sup> 彼女は当該報告原文にある助動詞(kannとwird)がND紙掲載文では隔字で強調された言うが、Honecker(1975a:276)では通常印字である。

が再び世に出ることを許されている。

「知識人の漠然とした期待はすぐに率直な議論へと濃密になった。そういうことは前回は 1964/65 年、新経済制度(NÖS)の最初の時期にあり得た。[この「時期」は青年コミュニケの時期でもあった。]

「再び世に」出た例として彼は、上記の H.カントやブラウンの作品のほか、歴史家クチンスキー(Jürgen Kuczynski)の「ドイツ哲学雑誌」(Deutsche Zeitschrift für Philosophie)への、哲学者ハーリッヒ(Wolfgang Harich)<sup>30</sup>の文化政策論の「意味と形式」誌への掲載を挙げた<sup>31</sup>。その上でリュールは続けた:

「雪解け現象は社会主義諸国における指導部交代または方針転換のいつもの本質的な特徴」である。なぜなら、第1に大衆の人気を得るために前任者との差異をきわだたせるため、第2に世論の支持を得るために知識人の支持を得たいからである。

第3に「共産主義者は文化を重要な指導手段と見なしている」が、「もし劇場や映画館が空っぽであり、本や雑誌が読まれなく、造形芸術が人目を引かず、テレビは東のチャンネルから西のチャンネルに切り換えられるなら、役に立たなくなる」からである。[テレビの問題は、分断国家、かつそのうちの脆弱国家たる東独には他の共産圏よりも深刻であった。同一言語で、上記のようにほぼ全国に西独から送信された。]

「その際、芸術は孤立した現象ではないことが注目されるべきである。諸変化や諸議論はすべてのイデオロギー的に重要な領域で生じている。すなわち文学や劇場、造形芸術(…)、音楽(…)と並んで、社会科学<sup>32</sup>や青年活動でも」生じている。

その結果「ウルブリヒの後期、すなわち 1965 年 12 月の中央委第 11 回総会[皆伐総会]以来、文化分野から身を引いていた知識人の一部を再び協力させることに成功した」。

但しそれは「非常にコントロールされ、ブレーキが掛けられた雪解け」であり、知識人は「春のあとには常に秋が来ることを学んでいた」から、[当初は]政権への「同意も明らかな慎重さと距離を保ちブレーキの掛かったものでしかなかった」。

加えて、ホーネッカーは知識人からの「あまり多くの信頼をあてにすることはできない」立場にあった。というのは彼は、1965-66 年に[皆伐総会政治局報告をはじめ]指導部の一員として「文化政策上の肅清を押し進めた」からである。

その上、「若干の著名な人たち」、つまり「ピアマンや

ハーベマン(Robert Havemann)、ハイム、クンツェ)は、「党がはっきりと彼らも得ようと努めたにもかかわらず、最初から離れたままであった」。

「中央委第 9 回総会をあなたはどのように評価するか」と聞かれ:

「知識人は、自由にされるや否や、党によって暗黙裡に前提とされる限界を踏み越えることがよくある」。党から見ると、知識人は「あまりに遠くへ行きすぎる」。そこに「緊張関係」が生じる

「ホーネッカーの有名な自由演説[1971 年 12 月]では、2 つの概念が並置されていた: “確固たる社会主義の立場”と“タブーなし”である。文化政策はこれら両極の間で演じられ、その両極が緊張関係を限定している」。

「第 9 回総会における批判」は、「スタイルと内容において文化的自由の以前の野蛮な拒絶とはなお著しく異なっている」。すなわち名前を挙げての攻撃も処分の脅しも密告の利用もしていない。

このような批判(自由の限界付け)とその穏やかさという二面性は、一方でホーネッカーの立場がまだ不安定かつブレジネフへの配慮のため「脱ウルブリヒ」にブレーキを掛ける必要があり、他方で「ホーネッカーの奪権以来の文化政策の発展は SED に大衆の基盤をもたらし、文化生活を控え目な規模で活性化し、魅力的にした」ので、その成果を無にしたいくないし、また強いブレーキは東独の国際的地位向上のために重要な第 10 回世界青年学生祭典の成功を危うくするからである。「この間に DDR の文化政策シーンは根本的に変化した」。

東独の文化政策の今後をどう見ているかと問われ:

東独の「諸雑誌における議論からよりも、私が DDR の知識人たちと最近かわした一連の会話から、より多く[1848 年ドイツの]三月革命前の息吹(einen Hauch von Vormärz)を感じている」。それは「ある革命が目前に迫っている」わけではないが、「まだ十分練り上げられていないある決心が迫っていると思う」。

問題は、こうした「精神的反体制派」の拡大を SED 指導部が「第 9 回総会の特徴であったように警告と好意的な妥協によって、なだめることができるかがあまりはっきりしていない」ことである。「衝突は決着をつけられねばならないし、そうなるだろう」。

党指導部にとって、「芸術の自由は常に党のイデオロギー独占に触れ、政治や経済のような支配の中心分野での自由化努力の拡大を呼び起こす」危険があるからである。しかし「新たな肅清は DDR の文化生活を再び…あの荒野に逆戻りさせるだけかもしれない」。

<sup>30</sup> 気鋭の哲学者として活躍したハーリッヒは 1956 年 11 月 29 日に逮捕され、翌年 3 月東独最高裁における公開裁判で「陰謀的・国家敵対的、反革命的グループの形成」ゆえに懲役 10 年の有罪判決を受けた。1964 年末に大赦によりパウツェン刑務所から釈放された。我々の分野の先学である故佐藤経明教授は逮捕当時「ハーリッヒのような優秀な男を逮捕するとは」と思ったとのことであった。

<sup>31</sup> リュールは作家クリスタ・ヴォルフの『クリスタ・T の追想』(Nachdenken über Christa T.)も挙げた。他の例示はすべてホーネッカー政権初期の刊行物であるが、Rühle(1973:692)はこの本について 1969 年刊行時の西独での書評を挙げただけで、1970 年代初めの扱いに触れていない。本書は、事前に「意味と形式」誌などに抜粋が掲載され予約が約 2 万件あったが、批判を受けて、1969 年春にわずかが東独の批評家や党関係者などに出荷されただけで出

荷停止となり、在庫は西独での版權を持つ出版社に売却され、西独では 20 万部売れたとのことである(ヴォルフ 1973: 記者解説 249)。

<sup>32</sup> 文学・芸術に比べ社会科学の統制はより厳しかった。とりわけ経済学教科書の刊行には党中央の許可が不可欠であった(それが得られず政治局員ミッタークの一声で完成原稿が没になった例は本誌 2 号表紙裏面参照)。東ベルリンの経済大学に滞在中に同大学の「科学雑誌」にマルクスの再生産表式についての拙稿(青木 1976)が訳載されることになり(Aoki 1982)、そのドイツ語訳作成を当時同大学助手(のちに東独の農業政治経済学の中心)の K. A. が手伝ってくれた。その際、彼が「我々は指導者の言葉を冒頭に掲げることになっているのだが、どうする?」と、遠慮がちに私に聞いた。むろん断ったし、彼も了解した。その掲揚は付度ではなく強制的しきたりなのだと分かった。こうしたことは文学には見られない。



### 9. おわりに:1976年11月ホーネッカー政権初期の自由化の終焉

リュールは、彼が予感した「三月革命前の息吹」を感じさせる「ある決心」の中身を語らなかった。それは、その頃から議論されていたであろうアンソロジー企画によって検閲打破を試みる「決心」だったと思われる。彼自身がかつて同じことを試みたと言われる(補注2)ので、なおさら「革命の息吹き」のような意義を感じたのだろう。

実際に、このインタビューから約半年後の1974年1月に、プレントドルフらのアンソロジー企画が具体化し、検閲挑戦が始まる。当然その企画は何ヵ月も前から話し合われたはずであり、リュールがそれを漏れ聞いたと思われる。彼の経歴ゆえ、上記の「最近かわした一連の会話」の相手は主に改革志向の作家たちだと考えられるからである。

アンソロジー企画による検閲打破の試みはシュタジの作戦重点「自主出版」によって阻止され、1976年春に企画が中止となり、同作戦も1976年9月2日に終了した。

シュタジは、同作戦によってこの企画を世論に全く知られることなく阻止したことを大きな成果と見なした。同作戦は主にシュタジの「分解」戦術によるもので、世間の目につく逮捕・有罪はなく、抑圧規模は限られた。

しかしその直後、1976年11月16日にピアマンが追放され、逮捕・有罪や追放・出国の事件が相次ぎ、他方で当局に対する非難・抗議の声がわき上がった。ここにホーネッカー政権初期の自由化の終焉が語られるようになった。

#### (補注1) 皆伐総会前夜に配られた「研究資料」リスト

SED皆伐総会、すなわち1965年12月15-18日の中央委第11回会議(3節)には「中央委員会委員と同候補180人」のほか、「200人以上のゲスト(大臣、教授、大使、中央委部長、県評議会・県経済評議会各議長、[国営企業]総支配人、作家・芸術家)」が招集された。

以下のような「研究資料」(Texten zum Studium)を入れた書類入れが、会議の前夜、彼らに配られた。資料の順番は1965年当時と同じと考えられる(Agde 1991:290f.)。

1	ウルプリヒト:1970年までの展望計画の諸問題(原稿、67ページ) <sup>33</sup> (1965.12.18ND公表)
2	ハイム(Stefan Heym):ミンスクの退屈
3	ビーラー(Manfred Bieler)の戯曲についての情報 1965.11.09
4	ビーラーのコメディ「ZAZA」の評価
5	芸術分野におけるイデオロギー現象についてのベルリン県指導部からSED中央委への情報 1965.11.19
6	ピアマンの詩集『針金のハーブ』1965.11.25 西ベルリンで刊行[野村修訳 1972所収]
7	ドイツテレビ[東独]の文化分野の状況についての報告抜粋
8	芸術知識人の中の雰囲気についての情報 1965.11.23

<sup>33</sup> これは皆伐総会2日目(16日)に行なわれた報告の原稿である。

<sup>34</sup> かつてチェックポイント・チャーリーのすぐ近くのドイチュランドハウスにFS(研究所)があった。研究員の一人とは、互いが入手した輸出禁止の東独官報特別版(計画化規則の一部など)を融通し合ったこともあった。同ハウスを東独側は報復主義者とスパイの巣と見ていたから、そこへの出入りが私のシュタジ・ファイルに載ったか

9	国営農場(VEG)Gustävel Kreis Sternbergにおけるドレスデン工科大学の学生投入についての情報 1965.10.27
10	「文化領域におけるイデオロギー問題」についての1965.11.23政治局決定の活用(1965.11.24中央委書記局決定)
11	映画学報告(Filmwissenschaftliche Mitteilung) 2/1965の内容についての情報 1965.11.29
12	ライブチヒの作家たちとのSED県指導部書記部の会談の評価 1965.12.01
13	青年活動と狼藉者の出現の若干の問題について(1965.10.11中央委書記局決定)
14	1965.10.31ライブチヒにおける事件[ビート騒乱]についての報告(1965.11.0中央委書記局)
15	SED県指導部第1書記へ(1965.11.02ウルプリヒト書簡)[ライブチヒのビート騒乱関連]
16	1965.12.03FDJ中央評議会内党員集会についての報告
17	FDJ中央評議会の新聞「Forum」編集部へのライブチヒ演劇大学学生138人の手紙と呼びかけ 1965.09.09ないし同09.07
18	次官ギースマンへのある女性教師の手紙 1965.10.19
19	ノイブランデンブルク県でのフンボルト大学学生の収獲投入における事件についての情報 1965.10.26
20	ロシュトック大学とグライフスヴァルト大学の状況についての情報 1965.11.08
21	ハレ西区郡裁判所における青年27人に対する裁判についての情報

(注)労働運動史研究所中央党アーカイブ(東ベルリン)に保管されていた。番号と表形式への変更は青木。タイトル以外は一部省略。(出所)Agde(1991:290f.)

#### (補注2) 西独ジャーナリスト・リュール(Jürgen Rühle)の人生と東独情報源:その情熱と突然死

本稿8節にインタビューと当時の職業を紹介したリュールは、東独建国以来、東独文化界との深い関わりを持っていた。

なぜなら彼は、捕虜としてのシベリア抑留から1949年初めにベルリンへ帰還した時、「転向者」(Bekehrter)ではなかったが、しかし「ロシアの人々と彼らの文学を愛する一人」(Jäger 1986:801)となっていたからである<sup>34</sup>。

彼のDA誌への寄稿も、上記インタビューのみではなく、1970-1985年に合計35本に達した。Rühle(1963:裏表紙)の著者紹介によれば:

彼は1924年[西]ベルリン生まれで、1942年兵士に、1945年戦争捕虜としてソ連に抑留された。1949年初めにシベリア抑留から帰還した。[その年の10月にソ連占領地区がDDR(東独)として建国された。]

彼は東ベルリンのフンボルト大学[旧ベルリン大学]で、とりわけハーリッヒやマイヤー、カントロヴィッツのもとで学びつつ、同時に「ベルリン新聞」(Berliner Zeitung)[以

と思ったが、そうではなかった。彼は捕虜としてではなく、戦争直後にベルリンでの反ソ宣伝のため逮捕されシベリア送りになった。彼がそこで出会った日本の抑留兵士たちは団結し立派だった、それに引き換えドイツ兵はだめだったと語った。たぶん、隣の芝生は青い、だろう。抑留日本兵士の間でも色々あったことがよく知られている。

下 BZ 紙]の文化編集部に属し、ゾントーク紙(Sonntag)にも演劇批評を書いた。ともに東ベルリンの新聞。

「無党派批評家として彼は SED からの不断の攻撃にさらされた。4 年間の[シュタジの]調査手続き(Untersuchungsverfahren)後、1955 年春に西ベルリンへの逃亡のみが彼を救うことができた。東ベルリンでの彼の活動期間に彼は、西の観察者が殆ど持っていない経験と資料[と人脈]を集めることができた。[調査手続きは捜手査続き(Ermittlungsverfahren)ではなく、いわばその前段階であった。]

彼は 1986 年 6 月 29 日に心臓発作で急死し、イエーガー(Jäger 1982; 1995 の著者)が DA 誌同年 8 月号に追悼文を寄せた(Jäger 1986)。

イエーガーは 1950 年代からリュウレを知り、また長年 DA 誌の「雑誌批評」欄のうちの「文化」担当であった。以下は特記しない限りこの追悼文に拠る。

多くの追悼の辞が、彼の「自由思想(Liberalität)とけんかっ早さ(Streitbarkeit)、すべての一面性に反対する彼の断固たる態度」を「正当にも大いに称えた」。その「基礎になった」のは、「BZ 紙における学芸欄編集委員としての 1949 年から 1955 年までのあの 6 年間の経験」であった。

それは、「希望と失望、また楽しみの中で、主体的な生命感のためのおそらく見込みはないが、しかし当時まだ絶望ではない闘いをする」年々であった。この間彼は無党派であり続けた。当時 BZ 紙への「たずな」は緩く、「党による統制は間接的でしかなく」、特に文化面がそうであった。いわば「ND 紙の対抗紙」の登場であった。

しかし「リアリズムのためのより創造的な勇気」という彼の記事(1952 年 10 月 21 日)が教条主義者の怒り狂った反応を引き起こした。その記事は、「異例さや意外性」を扱う「芸術家の権利」が「形式主義的として撲滅される」ことに反対したからであった。

「ND 紙が先頭に立ったプレスキャンペーン」が、「リュウレは、表向きマルクス主義的な論証によって本来はすでに最終的に打倒された“形式主義”を再生しようとしている」と批判し、「サボタージュやイデオロギー的妨害工作」という非難も加えた。そのため BZ 紙編集部内の SED 党員は、注意不足として自己批判を強要され、シュタジがリュウレへの調査(Untersuchungen)を開始した。

「リュウレはひるまなかった」。「ブロック(Ernst Bloch)からブレヒト(Bertolt Brecht)までのその国の著名作家たちの支持を知っていたからである。

彼は「スターリンの死後に、DDR において抑圧的な“反形式主義的”文化政策を放棄する可能性を、彼の学芸欄における策略と率直さの命知らずなミックスによってテストした。その可能性はウルプヒト指導部によってブロックされていた」。そのために「彼の記事をマルクスやレーニン、スターリン、毛沢東から巧みに選んだ引用によって飾り付けた」。

「そこにベルリン暴動と呼ばれることが多い東独全土での「人民蜂起」が 1953 年 6 月 17 日に発生した。」

文化人は「1953 年 6 月 17 日後の党の弱さを彼らの諸要求のために利用し」、「BZ 紙が知識人反体制派の新聞にな

った」。ブレヒトが書いた当局批判の詩をリュウレが載せた。

リュウレは、ゾントーク紙同年 7 月 5 日の演劇批評の最後に、「[SED 指導部の人民蜂起対策であるところの]「リベラルな“新路線”の持続性への疑念」を記し、同年 10 月には BZ 紙に、「政府は社会主義リアリズムを指令することはできないし、芸術家たちに創作過程の細部について教えることも政府の課題ではない」という論説を書いた。

「当時ライブチットの大学で勉強」していたイエーガーは、リュウレの一連の記事によって「困難な時期に勇気づけられ」、友人たちとともに「リュウレの勇気に感嘆した」。だからイエーガーは、リュウレについて「今でも当時集めた新聞切り抜きを入れた書類入れ」を持っている。

リュウレは「逮捕の脅し」のため東ベルリンでの仕事を 1955 年 3 月に断念した。[西ベルリンへ戻った。]

その後彼は大著を出し、特に Rühle(1960; 1963)<sup>35</sup>が好評で、専門家にとっても「標準作品」だが、「何年も品切れ」だから「再刊が緊急に必要である」。

彼は 20 年以上 WDR(西部ドイツ放送)でテレビの仕事をし、最近はその「歴史・現代史の編集長」であったが、昨年[1985 年]退職し「作家としての計画」を進めていた。

その 1 つが、DA 誌の単行本シリーズ(Edition Deutschland Archiv)のために、「自ら現場体験し影響もされた 1949-1955 年の DDR 文化政策を見直す計画」であったが、突然死のため果たされなかった。

de.wikipedia には、彼の BZ 紙勤務時にブレヒトも同僚であり、いわゆるベルリン暴動後に彼はブレヒトやベッヒャー(Johannes R. Becher)<sup>36</sup>、ブロッホら著名人と検閲緩和を目指したが、成果は殆どなかったとある。その典拠<sup>37</sup>を私は未確認である。

## 略語

シュタジ = Stasi. Staatssicherheit の略で、東独国家保安省(Ministeriums für Staatssicherheit、公式略称 MfS)またはその職員を指す。なお東独時代には「Staasi」(シュタージ)という呼び方もあった(例えば Plenzdorf 1995:263)。

ARD = Arbeitsgemeinschaft der öffentlich-rechtlichen Rundfunkanstalten der Bundesrepublik Deutschland、ドイツ公共テレビ「第 1」(Das Erste)の放送母体(西独)

BZ = Berliner Zeitung、ベルリン新聞(東独、現ドイツ)

CSCE = Conference on Security and Cooperation in Europe、全欧安全保障協力会議。ドイツ語略称は KSZE

DA = *Deutschland Archiv*、1968 年 4 月創刊の東独を中心にソ連東欧専門月刊誌、その後隔月刊に、現在はオンライン発行

DDR = Deutsche Demokratische Republik、ドイツ民主共和国(東独)のドイツ語略称

DEFA = Deutsche Film-AG、東独の映画会社

DKP = Deutsche Kommunistische Partei、ドイツ共産党(東独支配党 SED と提携、西独)

DSF = Gesellschaft für Deutsch-Sowjetische Freundschaft、独ソ友好協会(東独)

DT64 = Jugendstudio DT64、「青年スタジオ DT64」。東ベルリンに西独から招いた青年と東独青年の大規模交流行事「ドイツの出会い」の 3 回目かつ最終回であった「Deutschlandtreffen der Jugend 1964」の際に設置され放送した「特別スタジオ」(Son-

の努力」に感動したと言う。

<sup>37</sup> A. Brockmann (2006) Erinnerungarbeit im Fernsehen: Das Beispiel des 17. Juni 1953 (S.184f.).

<sup>35</sup> Rühle(1963)は Rühle(1960)のペーパーバック版であるが、それに著者紹介を加え、他方 74 枚の作家写真を省略した。

<sup>36</sup> Jäger(1986)は、しばしば失望や争いを経験した「DDR 最初の文化相(そして最後はかなり無力な)ベッヒャーを正当に扱うリュウレ

derstudio DT64)が引き継がれたラジオ放送で、東独青年の人氣を博した。

FDJ = Freie Deutsche Jugend、自由ドイツ青年団(東独)、SED 指導下の青年組織で、事実上官製青年団

IM = Inoffizieller Mitarbeiter、非公式協力者。多くはシュタジへの密告目的の部外協力者だが、「敵対的・否定的人物」の「処理」を指示されることもあった。また一部は他組織の仮面を付けたシュタジ職員であった。IM には色々な種類があったが、1989 年合計は約 18.9 万人(Engelmann 2016:171)

KJVD = Kommunistischer Jugendverband Deutschlands、ドイツ共産主義青年団、1925 創立、KPD 系

KPD = Kommunistische Partei Deutschlands、ドイツ共産党(戦前から存在、東独では同地域内のドイツ社会民主党と合併して 1946 年 SED に再編、西独では 1956 年非合法化。その後西独で発生した毛沢東派の 2 つの KPD とは別)

ND = *Neues Deutschland*、ノイエス・ドイチュラント(新ドイツ)、東独支配党 SED の中央機関紙

NDPD = National-Demokratische Partei Deutschlands、ドイツ国家民主党(東独)、SED に協力する「ブロック政党」の 1 つ、1990 年西独 FDP(自由民主党)に合流。

NÖS = Neues Ökonomisches System der Planung und Leitung、計画化と管理の新経済制度(東独の 1960 年代半ばの経済改革を示す用語)

OV = Operativer Vorgang、シュタジの「作戦事案」

SDAG = Sowjetisch-Deutsche Aktiengesellschaft、ソビエト・ドイツ株式会社(東独)

SED = Sozialistische Einheitspartei Deutschlands、ドイツ社会主義統一党(東独支配党)、1990 年から民主社会主義党(PDS)、2007 年から左翼党(Die Linke)

SP = *Der Spiegel*、シュピーゲル、西独、現ドイツのニュース週刊紙

Stasi = シュタジ。*Staatssicherheit* の略。MfS またはその職員。東独では *Staasi*(シュタージ)とも言った。

WDR = Westdeutscher Rundfunk Köln、西部ドイツ放送(ケルン)、ARD 加盟局

ZAIG = Zentrale Auswertungs- und Informationsgruppe、中央評価情報グループ(シュタジ本部の情報中枢)

ZDF = Zweites Deutsches Fernsehen、ドイツ第 2 公共テレビ放送(西独、現ドイツ)

## 引用文献

(注)本文記載の ND ほかの一部の記事や URL を除く。  
URL は特記しない限りすべて本稿掲載時有効。

青木國彦(1976)社会主義的拡大再生産の諸動態:再生産表式論、『現代日本と社会主義経済学』(木原正雄・長砂實編、大月書店)

----(2009)東独出国運動の発生:逃亡の時は過ぎ、闘うべき時が来た、研究年報『経済学』70-2(東北大学)  
(<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/gsk.html> 所収)

----(2018)ケネディのベルリン演説(1963年6月)再考:ブランド東方政策との比較、研究年報『経済学』76-1(東北大学)(上記 URL 掲載)

----(2018a)元東独政治犯ガルテンシュレーガーの冒険:東独国境自動射撃装置 SM-70 奪取の意味と限界、『社会主義体制史研究』1(<http://www2.econ.tohoku.ac.jp/~aoki/hsss.htm> 所収)

----(2019)1973 年第 10 回世界青年学生祭典(東ベルリン)に見る自由化百景:東独ホーネッカー政権初期の「自由化」について(1)、『社会主義体制史研究』10(上記 URL 掲載)

ヴォルフ、クリスタ、藤本淳雄訳(1973)『クリスタ・T の追想』河出書房新社

クンツェ、ライナー、大島かおり訳(1982)『素晴らしい歳月』晶文社

----、山下公子訳(1992)『暗号名「抒情詩」』草思社『広辞苑』、第 6 版、岩波書店

道家忠道他訳編(1980)『現代ドイツ短編集:ドイツ民主共和国の作家たち』三修社

野村修(1986)『ピーアマンは歌う』品文社

Agde, Günter (Hg.) (1991) *Kahlschlag\_Das 11. Plenum des ZK der SED 1965: Studien und Dokumente*, Aufbau Taschenbuch.

Aoki, Kunihiko (1982) Einige Probleme der sozialistischen Reproduktionstheorie: Thorie der Reproduktionsschemata, in: *Wissenschaftliche Zeitschrift Hochschule für Ökonomie Bruno Leuschner Berlin*, 27. Jg., H.4.

Bleek, Wilhelm (1995) Rezension: Allenthalben bestätigt, in: *FAZ*, 25.11.1995.

Dokumentation (1972) Die 4. ZK-Tagung - Schlußwort Honeckers, in: *DA*, H.3.

---- (1973) Breshnew in Ostberlin, in: *DA*, H.6.

---- (1973a) Die 9. Tagung des Zentralkomitees der SED, in: *DA*, H.7.

Dübel, Siegfried (1964) *Dokumente zur Jugendpolitik der SED*, Juventa.

Hager, Kurt (1972) Das Referat Kurt Hagers über die Kulturpolitik der SED, in: *DA*, H.9.

Hermlin, Stephan (1973) *Lektüre 1960-1971*, Aufbau.

---- (1974) ----, Suhrkamp.

---- (1995) *In den Kämpfen dieser Zeit*, Wagenbach.

---- (1995a) Ein Memorandum des Schriftstellers Stephan Hermlin von 1972 für Erich Honecker (Auszüge), in: *SP*, Nr.12.

Heym, Stefan (1974) *5 Tage im Juni: Roman*, C. Bertelsmann (2019 Penguin による)

---- (1988) *Nachruf*, C. Bertelsmann.

---- (1993) *Die Schmähschrift oder Königin gegen Defoe*, C. Bertelsmann.

Holzweißig, Gunter (1989) *Massenmedien in der DDR*, Zweite, völlig überarbeitete Auflage, Gebr. Holzappel.

Honecker, Erich (1975) *Reden und Aufsätze*, Bd1, Dietz.

---- (1975a) *Reden und Aufsätze*, Bd2, Dietz.

Jäger, Manfred (1982) *Kultur und Politik in der DDR: Ein historischer Abriss*, Edition Deutschland Archiv.

---- (1986) In memoriam Jürgen Rühle, in: *DA*, H.8.

---- (1995) *Kultur und Politik in der DDR 1945-1990*, Edition Deutschland Archiv.

Mählert, Ulrich; G.-R. Stephan (1996) *Blaue Hemden - Rote Fahnen: Die Geschichte der Freien Deutschen Jugend*, Leske + Budrich.

Müller-Enbergs, Helmut u.a. (Hg.) (2010) *Wer war wer in der DDR?*, 5. aktualisierte und erweiterte Neuauflage, Ch. Links.

Plenzdorf, Ulrich (1973) *Die neuen Leiden des jungen W.*, VEB Hinstorff. 早崎守俊訳『若き W のあらたな悩み』白水社

---- ; K. Schlesinger; M. Stade (1995) *Berliner Geschichten, »Operativer Schwerpunkt Selbst-verlag«: Eine Autoren-Anthologie: wie sie entstand und von der Stasi verhindert wurde*, Suhrkamp.

Rauhut, Michael (1993) *Beat in der Grauzone: DDR-Rock 1964 bis 1972 - Politik und Alltag*, Basis Druck.

Rühle, Jürgen (1960) *Literatur und Revolution: Die Schriftsteller und der Kommunismus*, Kiepenheuer & Witsch.

---- (1963) *Literatur und Revolution: Die Schriftsteller und der Kommunismus*, Knauer.

---- (1973) Ein Hauch von Vormärz: Interview zur kulturpolitischen Situation in der DDR, in: *DA*, H.7.

Ruß, Gisela (Hg.)(1976) *Dokumente zur Kunst-, Literatur- und Kulturpolitik der SED 1971-1974*, Seewald.

Schabowski, Günter (2009) *Wir haben fast alles falsch gemacht: Die letzten Tage der DDR*, Econ.

Schroeder, Klaus (2013) *Der SED-Staat, Geschichte und Strukturen der DDR 1949-1990*, 3., vollständig überarbeitete und stark erweiterte Neuauflage, Böhlau.

- Schubbe, Elimar (Hg.)(1972) *Dokumente zur Kunst-, Literatur- und Kulturpolitik der SED*, Seewald.
- SED (1973) Die 9. Tagung des Zentralkomitees der SED, in: *DA*, H.7.
- Sik, Ota (1966) *Ökonomie - Interessen - Politik*, Dietz.
- Spiegel (1975) „Da mußte der einzelne allerhand bedeuten“, in: *SP*, Nr. 52.
- (1995) Kämpfer in der Ecke, in: *SP*, Nr. 12.
- Spittmann, Ilse (1973) Die 9. Tagung des Zentralkomitees der SED, in: *DA*, H.6.
- Staatsverlag der DDR (1965) *Dokumente zur Jugendpolitik der DDR*.
- Ulbricht, Walter (1969) *Zum ökonomischen System des Sozialismus in der DDR*, Bd.1, Dietz.
- Walther, Joachim (1996) *Sicherungsbereich Literatur: Schriftsteller und Staatssicherheit in der Deutschen Demokratischen Republik*, Ch. Links. 作家でもある著者は 1968-1983年に出版社 Der Morgen の原稿審査係・編集者であり、またアンソロジー寄稿者でもあった(S.888)。本書執筆のために関連シュタジ文書「15万ページ」を閲覧した(Walter 1996a:224)。
- Wolle, Stefan (2013) *Die heile Welt der Diktatur: Herrschaft und Alltag in der DDR 1971-1989*, 4. Auflage(初版 1998), Ch. Links.
- ZAIG 14922, in: BStU, MfS.